新日本讀本

吉澤義則編

九

375.9
Y019
資料室

41408
教科書文庫
4
810
41-1926
200030
1722

375.9
Y019

奉天郊外馬羅

文學博士 吉澤義則編

新日本讀本

大正十五年
一月廿八日 文部省檢定濟

廣島大學圖書

廣島大學教 40730 圖書

新日本讀本　巻九

目　次

一　日本魂……文……水野廣德　一

寶祚無窮……詩……平木白星　六

二　春の惠……口……上田敏　九

三　月花のあはれ……（琴後集）　一六

四　東路の旅……近古……（東關紀行）　一九

五　暮鐘……詩……土井晚翠　二五

六　陶磁器の美……口……柳宗悅　三

七　佛像彫刻……日……瀧精一　四〇
八　美術に現れた日本國民性……日……藤懸靜也　四七
九　萩大名……狂言……（狂言記）　六〇
一〇　能狂言……文……芳賀矢一　六七
一一　元祿の三文豪……文……藤井紫影　七一
一二　孝と不孝の中に立つ武士……近世……井原西鶴　七五
一三　小山田太郎高家　一……近世……近松門左衞門　九六
一四　小山田太郎高家　二……近世……近松門左衞門　八八
一五　回想のシェクスピヤ……日……島村抱月　九三
一六　芳宜園大人の靈を祭る……近世……（琴後集）　一〇六

一七　和歌二集
古今和歌集より……一一〇
新古今和歌集より……一一四
一八　歴史と自然と人……日……大類伸　一一八
一九　歴史と自然と人……日……大類伸　一二五
二〇　知と愛……日……西田幾多郎　一三三
二一　希臘思潮……日……金子筑水　一三九
二二　希臘思潮……日……金子筑水　一四九
二三　文學と人生……日……藤井健治郎　一五三

附錄

神皇正統記抄
一 高氏……一六五
十訓抄抄
一 人の君となれるものは……一六七
二 人をあなづることは……一六八
三 はかなく打語らはむ友なりとも……一六九
四 萬の事を思ひ忍ばむは……一六九
五 世の中のかはり行くさま……一七〇

年々隨筆抄
一 月……一七〇
二 雪……一七〇
三 ゆうべやまさりたらむ……一七一
四 櫻……一七一
五 菊……一七二
六 古今のうつりかはり……一七二
七 梅……一七三
檀園文集抄
一 燕……一七四

二　蚊遣火……一七四
三　鹿……一七五
四　月……一七六
五　遠山寺の入相の鐘……一七六
六　旅路……一七七
七　聖賢の書……一七七
八　木の葉……一七八

目次終

帝國大學圖書之印

新日本讀本　卷九

一　日本魂

水野廣德
松山市の人、明治十一年生、豫備海軍大佐。

敷島の大和心を人問はば朝日に匂ふ山櫻花。大和魂と櫻の花とは、從來日本國民が外國に對して常に誇とせる二大特色なり。櫻の花の如何なる點が我が大和魂を象徴せるかは、余之を明知せずと雖も、武士萬能の封建時代に於て、花は櫻木、人は武士の語あるより推せば、古來櫻花は我が國民の最も好尚せる處なるが如し。藤田東湖は正氣の歌に、「發しては萬朶の櫻となり。」と詠じ、櫻花を以て神州正大の氣の發露と爲す。櫻花は果して我が大和魂を象徴(シル)(ボル)とするに足るか。

藤田東湖
名は彪、水戸藩士、儒者、安政二年（一八五五）歿年五十。

余素より形としての櫻花を愛す。其の千枝萬朶一時に開いて、紅雲搖曳霞と紛ふの壯景、恐らく他に比すべきの花無けん。其の紛々翩々として、花か、雪か、路もせに散る落花の風情を眺めては、義家ならずとも一句浮ばずんばあらず。しかしながら櫻花の質に至りては余甚だ之を好まず。三日見ぬ間の櫻かなで、其の梢に在るや久しからず、其の散るや實を留めず。加ふるに花に寒梅の薫なく、木に翠松の操なし。唯其の取るべき點は、をしまるゝ中に散りてぞ櫻かな、散際の潔きにあり。枝に醜骸を遺さざるにあり。日本人が櫻花を以て大和心に比する、亦主として此の點に在るが如し。散際の潔き、素より花としての趣あり。人として高し。されど唯これのみを以て大和心・日本魂の理想とするは封建時代の昔は知らず、生活複雑なる今の時代に在つては、餘りに淺薄なり。餘りに粗漫なり。餘りに貧弱なり。

由來日本人は生命に對して淡泊なり。生命に對して淡泊なるは、生活に對する抵抗弱きなり。生活に對する抵抗弱き者は生存競爭に勝つ能はず。潔く死ぬることのみを以て理想とし、潔く生くる事を工夫せざる國民は、到底世界に向つて大を爲す能はず。粘著力なく、忍耐力なく、抵抗力なく、持久力なく、生溫き春風の誘ふがまゝに、ぽつと開いてぽつと散る線香花火の如き櫻の花は、我が日本魂の理想とし、標本とするに足らず。二十世紀の日本魂なるものは、花ならば正に雪中馥郁の香を放ち、寒風に抗して能く實を結ぶ梅花の如くなるを要す。山ならば正に崇高平等・八面玲瓏、獨立不動の富士の如くあるを要す。

日清の役、日露の戰、我が軍連戰連勝す。國民戰勝の功を以て大和魂に歸す。或は然らん。爾來我が國民動もすれば日本魂中毒症に罹らんとす。否既に罹れるの徵あり。曰く「われに日本魂あ

膳羞

り。戰へば必ず勝つ。」曰く「われに日本魂あり。外敵恐るゝに足らず。」と。而して此等の言、多く彈丸の洗禮を受けず、白刃の膳羞を喫せざる人の口に依つて唱へらる。吾人現在の日本魂なるものに對して、然く深く信頼するの大膽を缺く。由來軍人として日本人の長所は突擊に勇なるに在り。短所は持久力の乏しきに在り。熱し易く、さめ易きは日本人の普遍性なり。其の激するや狂熱的にして生死を念頭に置かず。これ突擊に勇なる所以なり。其の冷むるや斷念的にして執著力を缺く。これ持久力の弱き所以なり。櫻花の開散、亦我が國民性に似たる點なしとせず。

余は敢て猥に大和魂を非難するものにあらず、又非認するものにあらず、更に又日本魂を以て外國魂より劣れりと爲すものにあらず。されど國を愛するものは獨り日本人のみにあらず。戰場に屍を暴すは獨り日本人のみにあらず。他を顧みずして自ら偉

舊套

がるを妄想狂と云ひ、己惚狂といふ。自信は尚ぶべき道德なるも、妄想と己惚とは恐るべき罪惡なり。二十世紀の日本國民たるものは、須らく當に鎖國封建時代に作られたる櫻花式大和魂の舊套より脱し、廣く世界を通觀して香もあり實もある新大和魂を建成するの要あるべきを信ず。死ぬるを忠義とのみ考ふる小愛國心を棄てて、責任觀念と義務意識とに立脚せる大愛國心を養成するの要あるべし。戰爭の突擊に勇敢なるのみが大和魂の本領に非ずと知れ。然らば何をか新日本魂と云ふ。曰く智・仁・勇の兼備、眞・善・美の具足に在り。

斯くてこそ初めて明治天皇の詠ませ給へる

國といふ國の鏡となるばかり
みがけますらをやまとだましひ

を實現するを得ん。

（波のうねり）

治らす

平木白星
名は照雄、千葉縣の人、詩人、大正四年歿、年四十。

寶祚無窮

平木白星

皇祖天照す日の大神
瓊々杵尊に言依したまはく
「豐葦原千五百秋瑞穗の國は
我が子孫の王たるべき地なり
宜しく爾就きて治らせよ
寶祚の隆えまさんこと
當に天壤と與に窮みなからん」

こゝをもちて
荒ぶる神を神問はしに問はし給ひ
神掃ひに掃ひたまひ

生日の足日

丕績

高天原に宮柱太しき立てて
慶を積み暉を重ね

建國以來百二十二代
叡聖文武の我が天皇
今日を生日の足日として
高知らせ給ふ高御座
萬方に勅して宣はく
「朕今丕績を纘ぎ遺範に遵ひ
內は邦基を固くして
永く磐石の安を圖り
外は國交を敦くして
ともに和平の慶に賴らんとす」

乾坤

天子大寶の位に即かせ給ふ
祝へよや
天に繼ぎて極を建て
乾坤を統ぶるまつりごと
言賀げよ
列邦朝し元々仰ぎ
明德を明になし給ふ
慶べよ

鏡の如く明なるをもちて照臨し
正しき大道こゝにひらけ
神劍を提げて荒ぶるものを和し
威ある平和こゝにうまれ

むた

上田　敏
號は柳村、文學博士、前京都帝國大學教授、大正五年歿、年四十四。

八阪瓊のひろがれるが如く四方を治らし
新しき文明こゝに成らん

現神わが大君の大御稜威
いやあらたにいや嚴かしく
天地のむた萬千秋の長五百秋に
とこしへかはらぬ御代の榮を
祝へやうたへや常磐堅磐に
君萬歳と祝へや

二　春の惠

上田　敏

生命の中流に棹さして十分に世の苦樂を味はひ、自己の意識を强めようとする者は、草木の角ぐみ渡

る春の日を浴びて、失はれた力のとみに復歸するを感じ、新しい熱意を以つて諸の印象を迎へる。郊外にも、都會にも、自然の風色に、人事の活動に、春光と生氣が漲り渡るのだから、彼岸から、八重までの櫻時ばかりでなく、木瓜も、海棠も、薔薇も、菫も、蓮華・蒲公英も、垣根の若葉も、鳥の聲もこまやかに懷かしく、しと〳〵と降る春の雨、花見歸りの土手のうへ上潮とともに春愁をもたらす夕暮の風、さま〴〵な夢思はせる靜寂な池の汀に、菖蒲咲く頃も過ぎて、瑠璃色めいた碧空に、白い雲がふわ〳〵と動いて行く春と夏の界までも、すべての景物は多感な人に迫つて來て、快くも亂心地あらしめる。世人動もすれば因襲に囚はれて、睦月・

上田敏

因襲に囚はる

如月・彌生の三月を春とし、櫻花の散るのを見て季すでに過ぎたとする者もあるが、それは眞に春の心を解したものでない。春は淺いもよく、盛もよく、闌なるもよい。

春はたゞ人の心を浮立たせて、氣輕な戯に赴かしめるのではない。この時うるはしい萬物は、生の惱を感じて、精力の横溢に壓迫される。そこに創作の苦痛がある。芽ばへ花咲くことは一種の緩和であつて、言はば重荷を下した時の安心に過ぎぬ。されば春の春色に對する人間の心も、萬物の活動に同情し共鳴して、こゝに平行した變化を感じ、偉大にして深沈たる大自然の節奏に合するのである。若し花を看てたゞ單純な官能の快感を貪るのみならば、同じ色の造花を見てもよい筈であるが、天然の千紫萬紅には、それ以上の深い意味が自ら籠つて居て、思邪なき靜觀の人心に通ずる。舊くしてしかも常に新しい春のめぐり來て、吾等の今更に胸

さわぎするのは、この大自然の脈搏を感ずるからである。爽快な夏も面白く、靜閑にして豐な秋も樂しく、寂としてまた自ら人に勇あらしめる冬も佳いが、自然の胸を抱く春の心は、年ごとに變りなく切である。

ローマ郊外の春（廢墟附近）

誰いひそめた言葉であらうか、イタリーの古歌に、「春は一年の若き時、若き時は一生の春。」とある。春を愛するは若きを愛するのだ。春を惜しむのは盛年の去易きを惜しむのだ。生と死と美と悅と愁と愛をうたふ古今の抒情詩には老と若さの對照がいつも伴奏をつけて居る。あゝ少年にして智

あらば、老年にして力あらばと、折返し〳〵歌ひつゞける古の智慧を聽くごとに、春と少年のあわたゞしく過行くのが惜しくて堪らぬ。「けふをつかめ。」と、ローマの詩人は敎へ、「手折れよ薔薇を、花咲くひまに。」けふがあすある世でもなし。」と、ドイツの詩にもいふ。この一見していかにも無分別な量見は、尋常の道學者や、考もなく口先でこれに雷同する俗流の思ふ程、しかく思慮のない說ではない。智と力といづれが尊い。よしや智淺くとも、生命の水は汲みえられる。力なくては泉の傍へも近よれまい。初は淺かつた智も、苦樂の經驗に依つて、終に自らを深くする例はあるが、年少にしてその世の春にふさはしい思と行がなく、徒に老成を期して空しく貴重な光陰を費すのは、怯に非ずんば鈍である。この類の人、偶〻老來こし方を顧みて一代の好機會を逸したのを悔む時、口にこそ出さないが、さぞ心中の殘念はつらいことであらう。

春の光の波に浮んで、暢やかに朗に生を樂しめ。「時」が食みへらす人間の力も、萬物の復活に交感して補はれて行く。しかもまた春の樂しみには、愁もある、悅もある、惱もあつて、それが吾等の生活力を刺戟し、促進する。かくて晩春の候、膚滑に筋も弛んで、やゝ倦怠を感ずるのは、勢力過剩の爲であらうか、續いて來る夏秋の努力に具へる準備とも思へる。年ごとの春の光を身に浴びて、心の奥まで浸つて居れば、老はおのづと退散する。人若し熱情を以て春を追求したなら、その追求の間に自然と力は加り、老は堰きとめられよう。

春の惠を輕んずるのは大の量見違である。天の與ふるを取らないと罰が當る。尤も一年中の氣候が餘り溫暖であつて、凛烈な冬の寒氣と寂寞を痛切に感じない時は、勿體なくも春の有難味を忘れ易くなる場合がある。例へば、日本の太平洋岸、殊に東海道及

聖ゴタール
スキス中央部に連るアルプス山脈のトンネル。長さ九哩餘。

アイロロ
聖ゴタールのトンネルの南口。

びそれより西南部に住まふ人々の中には、また春が來たかくらゐの微溫な感じを抱く者もあらう。しかしそれでは實にせつかくの樂しい世界を、自分で狹くするのである。對照は眞に物の味を强めるもので、白雪の冬よりして直ちに陽春の盛光に接すると、眼も眩むばかりの美に打たれることがある。往年私は歐洲觀光の途すがら、スキスから嶺南清明の天地に移らうとした時、聖ゴタールのトンネルに入る前までは、連山湖面悉く飛雪に蔽はれて、冷たい白い夢の中を通る心持であたが、汽車が暫く暗黑道を過ぎて、忽ち青天の白光に接するや、思はず聲を揚げて南歐の讃美を唱へた。アイロロといふ里にかゝつた頃、南方遙にイタリーの平原が黃金の光に浮んで、などのわたりかと思ふばかりなのを望んだ時、つく〴〵春の德を思つた。

若い美しい娘が餘りに手を大事にして居るのを見て、或人がど

うせ終には萎びてしまふ手ではないかと、たしなめるつもりで言つた時、或夫人は口を挿んでいつた、「しかし今はまだ萎びてゐない。」と。人生に對する最も賢明な態度は、この一言に含まれて居る。樂しい日に樂しめ。悲しみたければ悲しい日が來てからにするがよい。その時も若し出來るなら、自分の悲しみをもつて近くの人々に氣持わるがらせずに濟ませたいものだ。傳道の士が言つた如く、すべてに時がある。播く時もある。収穫の時もある。樂しむ時もある。悲しむ時もある。そして春の日は樂しむ時である。躊躇なく、心配なく、取越苦勞なく、暢やかに、朗に春の生を樂しめ。

（思想問題）

三　月花のあはれ

花をめづらしみ月をあはれむならはしなむ、ながれての世はさ

ながれての世

わかざくらの宮　履仲天皇を申す。

朝倉の宮　雄略天皇を申す。

藤原の世　持統・文武二帝の御代。

奈良の世　元明天皇から光仁天皇まで七代をいふ。

らなる。其みなもとを考ふるに、いとしも上つ代よりぞ起りにける。花に心を慰めませしはわかざくらの宮に始まり、月を言の葉にかけ給へるは朝倉の宮よりなむ聞えたる。しかありて後、藤原・奈良の御世にいたりては歌人おほくいで來て、かたみにみやびをかはし、心々に思をのぶること、皆月花をもて心の種とぞなしたりける。

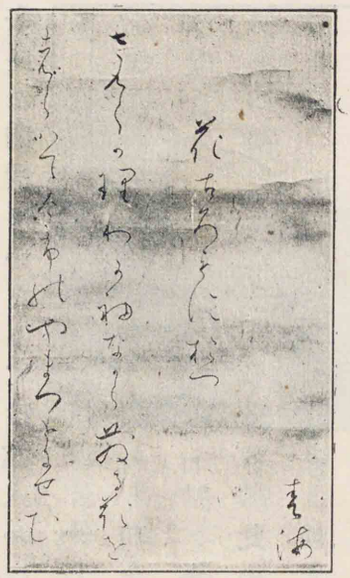
村田春海

かくて世のうつるにしたがひて、此のすさみいよ〳〵盛になりもてゆきて、あるは物おもひなき春を花によろこび、加はる老を月になげき、あるは賢きも愚なるもたよりなき所に花をたづね、しるべなきやみに月をたどり、あるは花のいのちを神にいのり、月のゆくへを佛にちぎり、又しものしもなる薪木こる山がつ、いぶせきふせやのし

かけまくも
うたげの筵

村田春海筆　春海
花ころもにおつ
さくらがりわ
が袖ながらち
る花を、はら
はでけふのや
まづさにせむ。

づのめまでも、月と花とに心をよせざるなむあらざりけらし。さるはかけまくもかしこき大御遊のきはことなるが中にも、月と花との爲には時にのぞみて殊更にうたげの筵を設け給ふ事おきてたがはず、のどかなる御世のためしにさへなり來にけり。かくさまざまなる代々のあとを見るに、いにしへも今も高きもみじかきも、月と花とをなつかしみおもへること等しくて、いづれをあまれりとし、いづれをたらずとして、一かたに心よせたる人たれかはあらむ。しかるを今にありて其のよしあしをことわりいはむは人わらへにもなりぬべし。



村田春海筆

しかはあれど之をことわるに故あり。その劣り優りはもとよりかれにはあらざめれど、おのがじし打見る人の身に比べ思はむには、其のよるかたいかでかなからむ。抑花は春にありて賑しきにより、月は秋にありて悲しみをぞ起すなる。今このくちおきなが心にとりていはば、身すでに老いたれば蕾める花の盛まちいでむたのしみもなく、品いやしければ花々しき世をへて時にかをらむ願もかけず。たゞ鏡にうちむかふ折しも、頭の霜を見ては月の影かと驚き、かたぶく齢をおもひては入りかたの月ぞ身によそへつべき。かゝれば花にはおのづからにうとく、月にぞ心のひかれける。さはいへこはわが身ひとつのすさみなり。おほよそ人の爲にはいかでかまねびもいでむ。

（琴後集）

おのがじし
くちおきな

おほよそ人
琴後集
村田春海の著、十五卷。村田春海、江戸の人、國學者。文化八年（一八一一）歿、年六十六。

巻末地圖説明
逢坂の關
今の大津市の

四　東路の旅

東山の邊なるすみかを出でて、逢坂の關打過ぐる程に、駒ひきわ

南、文德天皇の天安元年ここに關所を建てられ、桓武天皇の延曆十四年に廢せられた。

駒ひきわたる　逢坂の關の清水にかげ見えて、今やひくらん望月の駒。紀貫之（拾遺集）

函谷　遊子猶行ニ於殘月ニ、函谷鷄鳴。（和漢朗詠集）

蟬丸　盲人、或はいふ延喜帝の第四皇子。和歌及琵琶に巧みであつた。

藁屋　世の中はさてもかくても過してん、宮も藁屋もはてしなければ（今昔物語）

たる望月の頃もやう〳〵近き空なれば、秋霧たちわたりて、深き夜の月影ほのかなり。木綿付鳥かすかに音づれて、遊子なほ殘月に行きけん函谷の有樣思ひ出でらる。昔蟬丸といひける世捨人、この關のあたりに藁屋の床を結びて、常は琵琶を彈きて心をすまし、和歌を詠じて懷を述べけり。嵐の風の烈しきを佗びつゝぞ過しける。

古の藁屋の床のあたりまで
心をとむるあふさかの關

關山を過ぎぬれば、打出濱・粟津原などと聞けども、未だ夜の中なればさだかにも見え分かず。昔天智天

志賀の都（東海道名所圖會）

關山　關所のある山で、こゝは逢坂山を指す。

打出濱　今の大津市松本石場邊の古名。

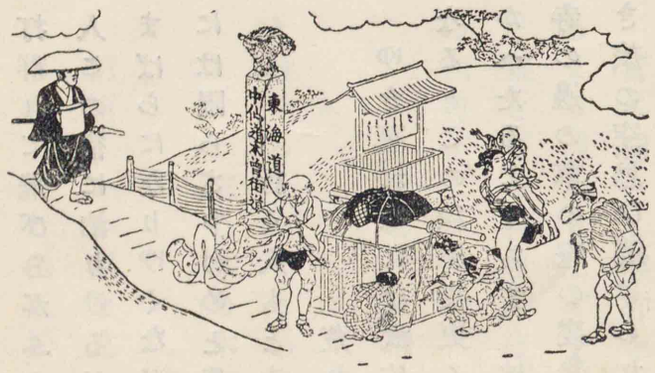
粟津原　大津市の東南、膳所町の内。

飛鳥の岡本宮　高市郡岡村にあつた。舒明天皇の二年から六年間の皇居。後齊明天皇の二年に都と定まり、天智天皇の六年迄十二年間の皇居。

野路　近江國栗太郡。

篠原　近江國野洲郡。

南山の影



篠原附近（東海道名所圖會）

皇の御代、大和の國飛鳥の岡本宮より近江の志賀の郡に都遷ありて、大津宮を造られけりと聞くにも、このほどは古き皇居の跡ぞかしと覺えてあはれなり。

さゞ波や大津の宮のあれしより
名のみ殘れる志賀のふるさと

この程をも行きすぎて、野路といふ處に到りぬ。草の原露繁くして、旅衣いつしか袖の雫ところせし。篠原といふ處を見れば、西東へ遙に長き堤あり。北には里人住家を占め、南には池の面遠く見え渡る。向ひの汀、綠深き松のむらだち、波の色も一つになり、南山の影を浸さねども、青くして混濁たり。

昆明春。昆明春。春池岸古春流新。影浸二南山一青滉瀁。波沈二西山一紅淵淪。（白氏文集）

遺愛寺
日高睡足猶慵レ起、小閣重レ衾不レ怕レ寒。遺愛寺鐘欹レ枕聽、香爐峯雪撥レ簾看。（白氏文集）

洲崎處々に入りちがひて、葦かつみなどおひ渡れる中に、鴛鴦・鴨の打群れて飛びちがふさま葦手を書けるやうなり。昔都を立つ旅人この宿に泊りけるが、今は打過ぐるたぐひのみ多くして、家居もまばらになりゆくなど聞くこそ、變りゆく世の習、飛鳥の川の淵瀬には限らざりけめと覺ゆ。

行く人もとまらぬ里となりしより
荒れのみまさる野路の篠原

ゆき暮れぬれば、武佐寺といふ山寺のあたりに泊りぬ。まばらなるとこの秋風、夜更くるまゝに身にしみて、都にはいつしか引きかへたるこゝちす。枕に近き鐘の聲、曉の空に音づれて、かの遺愛寺の邊の草の庵の寢覺もかくやありけんとあはれなり。行末遠き旅の空、思ひ續けられていたう物悲し。

都出でていくかもあらぬ今宵だに

柏原
近江國阪田郡の山驛。

不破の關屋
美濃國不破郡關が原村大字松尾に其の遺跡がある。後京極攝政兼實の第二子、藤原良經（一八二九—一八六六）

かたしきわびぬとこの秋風

音に聞きし醒井を見れば、蔭暗き木の岩根より流れ出づる清水、あまり涼しきまですみ渡りて、實に身にしむばかりなり。餘熱未だ盡きざる程なれば、往還の旅人多く立ちよりて涼み合へり。かの西行が、

道のべに清水流るゝ柳かげ
しばしとてこそ立ちとまりけれ

と詠めるもかやうの處にや。

道のべの木蔭の清水むすぶとて
しばしすゞまぬ旅人ぞなき

柏原といふ處を立ちて、美濃國關山にもかゝりぬ。谷川霧の底にもおとづれ、山風松の梢にしぐれわたりて、日影も見えぬ木の下道、あはれに心ぼそし。越えはてぬれば不破の關屋なり。萱屋の

荒れにし後
人すまぬ不破の關屋の板びさし、あれにし後はたゞ秋の風（新古今集）

株瀬川
今杭瀬川と書く、美濃國安八・不破二郡の境を流れる。

照る月なみ
水の面に照る月なみをかぞふれば、こよひぞ秋の最中なりける。源順（拾遺集）

二千里の外
三五夜中新月色、二千里外故人心（白氏文集）

東關紀行
源親行又は其父光行の著ともいふ。東海道の行程を記せるもの。

板庇年經にけりと見ゆるにも、後京極攝政殿の「荒れにし後はたゞ秋の風。」とよませたまへる歌おもひ出でられて、この上は風情もめぐらし難ければ、鄙しき言の葉をのこさんもなか〳〵に覺えて、此處をば空しく打過ぎぬ。

株瀬川といふ處にとまりて、夜ふくるほどに川端に立出でて見れば、秋の最中の晴天、清き川瀬にうつろひて、照る月なみも數みゆるばかりに澄みわたれり。「二千里の外の故人の心。」思ひやられて、旅の思いとゞ抑へ難く覺ゆれば、月の影に筆を染めつゝ、「花洛を出でて三日株瀬川に宿して一宵、しば〳〵幽吟を中秋三五夜の月に傷ましめ、かつ〴〵遠情を前途一千里の雲に送る。」など、ある家の障子に書きつくるついでに、

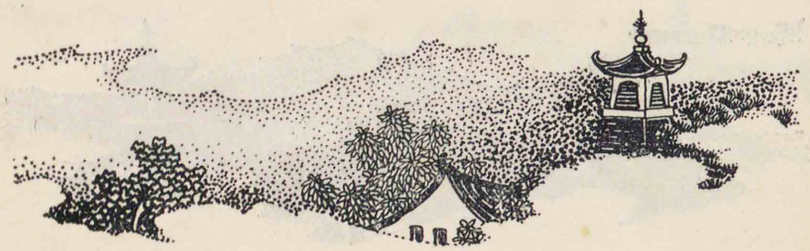
知らざりき秋のなかばの今宵しも
かゝる旅寢の月を見んとは

（東關紀行）

土井晩翠
名は林吉、仙臺市の人、明治四年生、第二高等學校教授。

劫風

法音



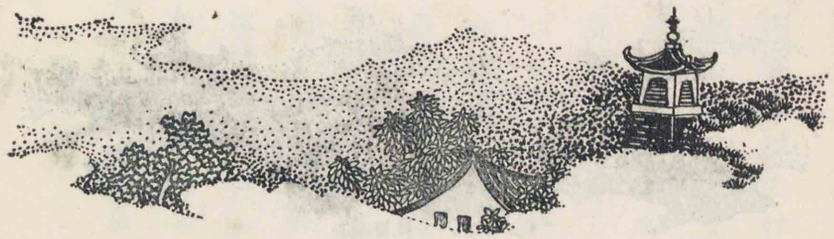
五　暮鐘

土井晩翠

森のねぐらに夕鳥を　麓の里に旅人を
靜けき墓に亡骸を　夢路の暗に天地を
送りてひゞく暮の鐘

春千山の花ふゞき　秋落葉の雨のおと
誘うて世々の夕まぐれ　劫風ともに鳴止まず

天の反響地のさけび　恨の聲か慰めか
過ぐるを傷む悲か　來るを招く喜か
無常をさとす戒か　望をつぐる法音か



友高樓のおばしまに　別の袂重き時
露荒涼の城跡に　懐古の思しげき時
聖者静けき窓の戸に　無象の空を思ふ時
大空高く聲揚げて　今はとさけぶ暮の鐘

人住む處行く處　嘆と死とのある處
歌と樂とのある處　涙かなしみ憂き惱み
わらひ喜樂しみと　互に移り行くところ
都大路の花のかげ　白雲ふかき鄙のさと
白波寄する荒磯邊　無心の稚兒の耳にしも
無聲の塚の床にしも　ひとしくひゞく暮の鍾

雲飄揚の身はひとり　五城樓下の春遠く

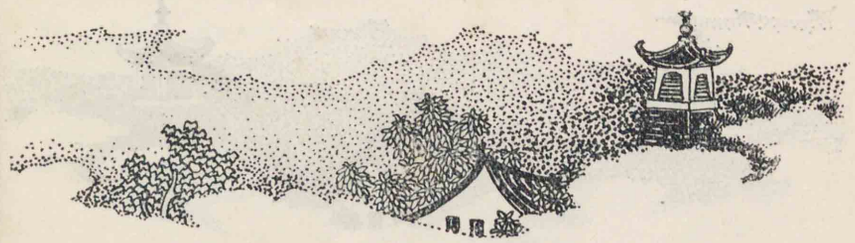
都の空にさすらへつ　思ひ忍ぶが岡の上
我も夕の鐘を聞く

鐘のひゞきに夕がらす　入日なごりの影薄き
彼方の森にゐるがごと　群り立ちて淀みなく
そゞろに起る我が思

しづまりかへる大空の　波を再び搖がして
雲より雲にとよみ行く　餘韻かすかに程遠く
浮世の耳に絶ゆれども　知るや無象の天のそと
下界の夢のうはごとを　名殘の鐘に聞取らん
高き尊き靈ありと

閻浮

恨みなはてそ



天使の群をかきわけて
鐘よひかりの門の戸に
下界の暗は厚うして
浮世の花は脆うして

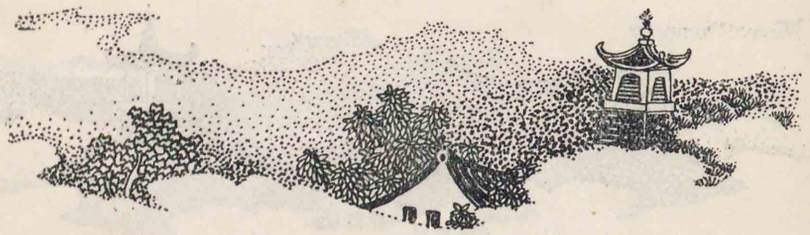
長く幽けくまた遠く
呼ぶか閻浮の魂の聲
われも浮世の嵐吹く
入江の春は遠くして

恨みなはてそ世の運命
無限の過去を前に見て
はた今こゝに望あり

昇りも行くか無限の座
何をかなれの叫ぶらん
聖者の憂絶えずとか
詩人の涙涸れずとか

今はた續く一ひゞき
かの永劫の深みより
波間に浮きし一葉舟
舟は半ばに沈みぬと

無限の未來後にひき
われ今こゝに惑あり
笑ひ樂しみ憂きなやみ



暗と光と織りなして
いざ響かせん暮の鐘
かくて思をかはしつゝ
泉と海とつなぐごと

吹くや東の夕あらし
かの中空に集りて
ふたつ再び別る時

人生・理想はた秘密
我が笑ひしも幾度か
望の星の消ゆるごと
罪か濁世か我知らず

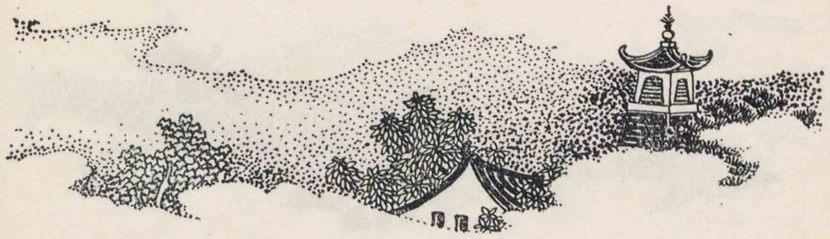
歌ふ浮世のひとふしも
さきだつ魂に來ん魂に
ながれひとすぢ大川の

寄するや西の雲のなみ
暫しはともに言もなし
秘密とかれは叫ぶらん

詩人の夢よ迷よと
眞畫の光かゞやきて
浮世の塵に塗れては

祇園精舍
セントソヒヤ
コンスタンチノープルにあるキリスト教の教會。

驂鸞
鳳樓

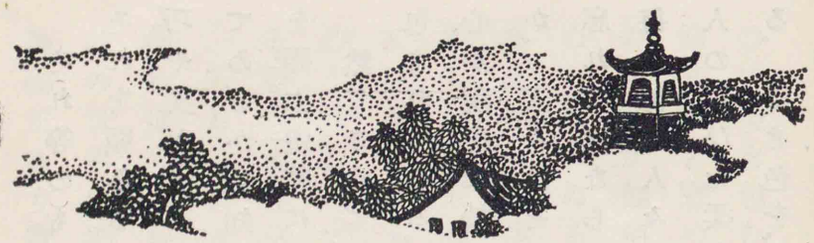


その塵深き人の世の　夕暮ごとに聲揚げて
無限永劫神の世を　警め告ぐる鐘のおと
源流既に遠くして　濁波を揚ぐる末の世に
無言の教宣りつゝも　有情の涙さそへるか

祇園精舍の檐朽ちて　葷酒の香のみ高くとも
セントソヒヤの塔荒れて　福音俗に媚ぶるとも
聞けやゆふべの鐘のうち　靈鷲橄欖いにしへの
高き尊き法の聲

天地有情の夕まぐれ　我が驂鸞の夢覺めて
鳳樓いつか迹もなく　花もにほひも夕月も
現は脆き春の世や　尾の上に霞立ちきりて

柳　宗悅
東京市の人、明治二十二年生、文藝家、東洋大學教授。



縫へる仙女の綾衣　袖に嵐はつらくとも
自然の胸をゆるがして　ひゞく微妙の樂の聲
その一音はこゝにあり

天の莊嚴地の美麗　花かんばしく星照りて
自然のたくみ替らねど　煩累世々に絶えずして
理想の夢の消ゆる間は　絶えずもひゞけ長へに
地籟・天籟身に兼ぬる　ゆふいりあひの鐘の聲

六　陶磁器の美

柳　宗悅

讀者は特に東洋での日々の生活の友であつた陶磁器について、嘗て何事か考へたことがあるだらうか。

磁器
磁土に長石及石灰の粉末を加へ高熱度で燒く。地質堅く膚密で半透明、打つと金物の樣に響く。（九谷・瀬戸・清水・有田燒など）

陶器
磁器の磁土の代りに陶土を用ひる。素地不透明、質やゝ、堅く音は濁つてゐる。（薩摩・淡路・出雲燒など）

それ等のものが吾々の周圍に餘りに多い爲に、却て多くの者はそれを顧みる心を忘れてゐる樣である。然も近代に於てその技巧や美が著しく沈んだ爲に、人は深い感興をそこに起す機を失つてゐるかも知れぬ。これに反して或人はかゝるものを愛するのを弄ぶ遊戯に過ぎないといつて、その心を卑しむ樣にさへみえる。

然しさうでない。盡きない美がいつもそれ等の器の中に厚く包まれてゐる。かゝる不注意や、かゝるものの見方は寧ろ人々の心が現代に於て、味なく荒んできたことを告げるのではあるまいか。人々はそれ等のものが、嘗ては日々の親しい友であつた事を忘れてはならぬ。それを只の器だといひ過ぎてはいけない。日毎日毎に人々はそれ等のものと共に煩ひの時を過してゐる。人人の煩ひを柔らげようとして、凡べての器はよき形をと擇んでゐる。よき色を、よき模樣をと示してゐる。陶工は嘗てそれ等のも

のに美を包む事を忘れなかつたのである。それは人々の周圍を飾り、眼を慰め、心を温めようとて作られたのである。吾々の日々の生活が如何にそれらのものの匿れた美によつて、知らず〳〵温められてゐるかを知らなければならぬ。今の人々は喧しい無雜な此の世の生活のうちに、それ等のものを顧みる餘裕を有しないかしら。私はかゝる餘裕を貴い時間の一部であるといつも考へてゐる。かゝる餘裕を富の力に歸してはいけない。眞の餘裕は心が產むのである。富は美の心までを作りはしない。美の心こそ吾々の生活を豐にするのである。

若しも吾々にさへ潤つた心があるなら、吾々はこの愼ましい窯藝の世界に於て、匿れた心の友を見出す事が出來る。それを只趣味の世界であるといひ去つてはならぬ。そこにも豫知し得ない神祕があり、驚嘆がある。そこに一度親しむなら、吾々はそれらの

美を通して、民族の心情や、時代の文化や、自然の背景や、又人間そのものの美に對する關係をさへ味はふ事が出來る。それを弄ぶ趣味に止めるものは、見る者の心の卑しさによるのである。若しその内に近づくなら、それは屢吾々を深い世界に迄導いてくれる。美しさは又深さではないか。私は私の宗教的思想が、實際それ等のものによつて、永い間育まれ溫められて來た事を感じないわけにはゆかぬ。

陶磁器の美（壺）柳宗悅氏藏

壺
李朝窯辰砂染付圓紋面取
丈六寸六分
巾六寸五分

私は私の傍に集めた幾つかの作品に對しても、私の感謝の情を默してゐてはならないと思ふ。

わけても陶磁器の美は「親しさ」の美であると私は思ふ。私達はそれ等の器に於て、靜な親しげな友を、いつも側ちかく持つことが出來る。それは殆ど私達の心を亂すことなく、いつも室内に私達を迎へてくれる。人は彼の好むまゝに彼の器を擇べばいゝ。器も亦常に私達の好む場所に置かれる事を待つてゐる。それは全く人々の眼に觸れようとして作られたのではないか。靜に默するそれ等の器も、必ず彼等にふさはしい心情を内に包んでゐる。私はそれ等のものが愛の性質を持つてゐることを疑ふわけにゆかぬ。それは美しい姿を持つてゐるではないか。然もその美しさは心の美しさが產んだのではないか。彼等を愛するものは、必ずや二つの手の間にそれを抱きあげる。私達がかくしてそれに眼を注ぐ時、溫い吾々の手を、それらのものも慕つてゐる樣に見える。人の手は器にとつては、きつと母の溫味があるにちがひない。

愛し得ない陶磁器がどこにあらう。愛し得ないなら、それが冷かな手で造られたか、又は冷かな眼で見られるが故であらう。

私は彼等に愛の性質を感じるにつれて、如何に陶工が愛を以てそれを産みつくつたかを想はないわけにはゆかぬ。陶工が一つの壺を彼の前に置いて、餘念なく彼の心をその内に注いでゐる光景を、私はよく想像する。試みに想へよ。例へば一つの壺がつくられつゝある、その瞬間を。此の世に於て、壺と彼とたゞ二人ぎりである。否、製作に餘念のない其の時、壺は彼に生き、彼は壺に生きる、愛が二人の間を通つてゐる。一つに流れるその情愛のうちに、實に美は生れるのである。讀者は嘗て陶工の傳記を讀んだことがあるだらうか。眞に美に奉仕する一生の實例を屢、そこに讀む事が出來る。試練に試練を重ね、幾度か失望し幾度か勇氣を起し、家庭を忘れ、私財を盡し、眞に仕事に一身を沒入した彼等を私は忘

れる事が出來ない。燒きに燒いて、燒き至らず、既に薪を得る資も盡きて、彼自らの家のみが薪として殘る時を、讀者は思ひ至つた事があるだらうか。實際自らを忘れる、かゝる異常な出來事によつて、此の世の優れた作品は得られたのである。吾々はそれ等の作品に包まれた熱情を、冷かに見過してはならぬ。愛なくしてどうして美が生れてこよう。陶磁器の美も、かゝる美の現れである。器は實際に用ひられるが爲の器である。然し功利の念のみがそれを作り得ると思ふのは誤りである。眞によき器とは同時に美しき器との意であらねばならぬ。功利の世を超えて、愛が陶工の胸に滿ちる時に、彼は優れた作を産むのである。眞に美しい作は、作る事それ自らを樂しんだ時に生れるのである。器が只功利の爲に作られる時、それは醜さに陷るのである。作者の心が淨まる時、器も心の美しさを受けるのである。凡べてを忘れる刹那が、美

過程

の至る刹那である。近世窯藝の恐しい醜さは、功利の心が產んだ物質的結果である。陶磁器を只の器だと思つてはいけない。器と云ふよりは寧ろ心である。それも愛の籠る心である。親しさの心である。その美は親しさの美であると、私は思ふ。

讀者は、こゝにそれ等の美が如何にして生れるかの過程に就いても、深く省みる所がなければならぬ。陶磁器の深さは常に冷かな科學や機械的作法を超える。美はいつも自然に歸る事を求めてゐる、今日も尙美しく器を燒くものは自然の薪である。如何なる人爲的熱力も、薪によつて得られる柔か味を與へる事は出來ぬ。かの轆轤も今尙自由な人の手や足を求めてゐる。均等な機械の運動は、美しき形を產む事は出來ぬ。あの釉藥を最も美しい効果に擂碎くものは、あの不規則な遲々とした人の手の運動である。單なる規則は美を產むことは出來ぬ。石も土も又は色も、天然の

相對の科學

ものをこそ求めてゐる。近世の化學が贈る人爲的顏料が、如何に醜いかを吾々は熟知してゐる。(吾々は朝鮮に於て、恐らくは支那に於てもさうであらうが、屢〻動搖のはげしい不完全な轆轤を發見する。然し古來、かゝるものが却て自然な美を產んだ事を想はないわけにはゆかぬ。)科學は規則を建てるが、藝術は自由を欲するのである。古代に、人は科學を持たなかつたが、美しい作を產んだのである。近世に於て、人は科學を持つが、藝術を持たない。製陶の術は日に細に研究される。然し科學はまだ一度も美しい作を產んでゐない。私は今日の科學を、その未完成な狀態に於て謗る事を好みはしない。然し科學者は、科學の制限に對して、謙遜な承認を持たねばならぬ。相對の科學は究竟な美の世界をも犯す事は出來ぬ。科學は美に服從し奉仕すべき科學である。心が機械を支配せず、機械によつて心が支配される時、藝術は永く吾々から

瀧精一
東京市の人、明治六年生、美術批評家、文學博士、東京帝國大學教授。

去るのである。規則も一つの美であらう。然し不規則は藝術にとつて更に大きな美の要素である。恐らく、最も高い美は、是等のものが一つに調和された時であらう。不規則中の規則が最大な美を示すと、私はいつも思ふ。不規則を持たない規則は只の機械に過ぎぬ。規則を包まない不規則は紊亂に過ぎぬ。(支那や朝鮮の陶磁器が何故かくも美しいかは、不規則中に規則、未完成中に完成が流れてゐるからである。日本の多くの作品は完成の癖に傾くが故に、屢、生氣を失つてゐる。)

七　佛像彫刻

瀧精一

支那・日本の彫刻は、いづれも印度傳來の佛教に伴なつて開けたものであることは明白である。又印度の方ではギリシヤの影響が存外大きいのだから、延いて支那・日本の彫刻が印度並びにギリ

梵天

塑製であつて高さ六尺八寸一分ある。作者は古來良辨僧正と傳へられてゐる。その顏面には直立合掌せる相好の高雅と、溫和な無量の威德とを具へてゐる。

シヤ的風致を傳へて居ることも、今日では殆ど動かすことの出來ぬ定說となつてゐる。

元來支那本國では、佛教渡來以前には、さのみ彫刻の發達してゐた形跡は認められてゐない。實に支那上古に於ける偶像彫刻は微々たるもので、僅に金石類の工藝的な彫刻が行はれてゐたに過ぎないやうである。これは一つには、その國の古代の風習が然らしめたのであらうと思はれる。特に支那では、その特殊な倫理主義に基づいて、懲惡の目的を以て惡人の像を作り、これを打つたり毀つたりした。銅器などの工藝品でも、さま〴〵な姦惡な者の像を刻する

梵天（東大寺三月堂）

風が行はれた。ところが、一體美術としての彫刻には、惡人の像は不適當なのだから、かういふ物の盛に行はれたといふことは、とりもなほさず、この國の藝術の發達することの出來なかつた所以なのである。

女神アテーネ（英國博物館藏）

女神アテーネ　これはフイヂアスの作にかかるパルテノン殿内の女神の彫像である。その武裝と風貌との凜々しさを視よ。

我が國では佛教渡來以前にも、土偶類は隨分盛に製造せられたに相違ないが、これ等は專ら崇拜の對象として作られたものではなく、單に實在人の代用に供せられたに過ぎない。それで佛教の輸入せられてからの彫刻はどうかといふと、最初は印度ギリシヤ式そのままの物が多かつたのであるが、次第に自國の風に變化して來て、新

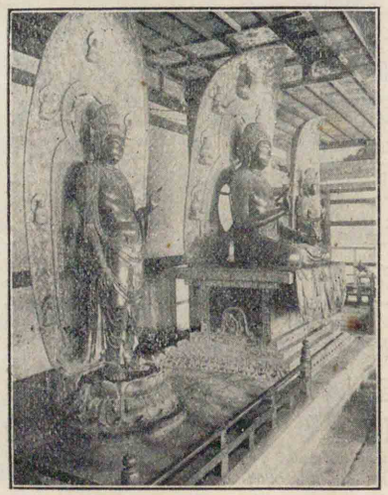
推古時代　第三十三代推古天皇の時。
天平時代　第四十五代聖武天皇の時。

藥師三尊　銅鑄物にして中尊は臺座とも一丈四尺、脇士は蓮座とも一丈三尺、この像は當代の傑作で、しかも東洋造像術の一大發達を告げた標識とも認むべきものである。

東大寺三月堂　奈良市にある。華嚴宗の大本山、聖武天皇の創建、大佛を以て名高い。三月堂は同域内に在つて、本名を法華堂又は金鐘寺といふ。天平五

機軸・新意匠を出して、支那や朝鮮は勿論、その本家たる印度以上に進歩したのである。

我が國では、推古時代が始めて佛像彫刻の開けた時代で、この時代の作品はなほ素朴の域を脱してゐない。然るに天平時代に至つて異常な發展を來した。勿論當時は支那唐代の感化もあつたが、又大いに獨立自由の發達が見られるのである。史家は或は天平時代を以て日本彫刻の黃金時代だと稱へてゐる。いかにも今日遺つてゐる當時の作品中、東大寺三月堂の梵天・帝釋の如き、藥師寺金堂の藥師三尊の如き、東大寺戒壇院の四天王の如きは、日本藝術史を飾る至妙な作品といはね



藥師三尊

年僧良辨の開基。

藥師寺
大和國生駒郡都跡村にある。法相宗の大本山、天武天皇の創建。

戒壇院多聞天
塑造にして高さ五尺四寸、多聞天は北方天王にして百千の夜叉を統領し、佛の道場を守護する。身に金甲を被つて、掌上には常に舍利塔を擎げてゐる。（この圖は舍利塔を缺いてゐる）この狀貌は雄武沈實である。

戒壇院
授戒の式を行ふ所。

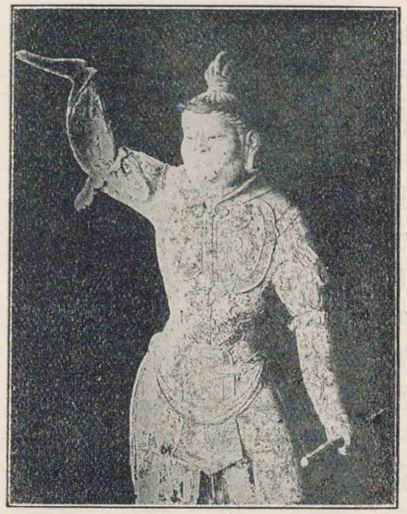
四天王
持國天・增長天・廣目天・多聞天で、佛法守護の神。

アテーネ神
ギリシヤ神話に由胄を著て凱歌を奏しながら主神ゼウスの頭部から躍り出たと傳へられる女神。

ラオコーン
この肉體の苦痛の寫實的表現は、彫刻に於て表はされる殆と極度に達して居るが、今日では希臘彫刻の廢頽した時代の作として、更に重きを措かれぬやうになつた。

ラオコーン
ギリシヤ傳説にトロイのアポロ神に奉仕

ばならぬ。藥師は面相が豐滿で、體格もよく整ひ、衣紋も流麗で、いかにも自然に出來てゐる。三月堂の梵天・帝釋の方は、前者のやうに豐滿ではなく、寧ろ崇高典雅と評すべきで、一種いふべからざる神的な性格を象徴し、形體と思想の融合宜しきを得てゐる。人或はこれを以てギリシヤ彫刻のアテーネ神の俤のあるものと評するのも、あながち失當の言ともいはれない。戒壇院の四天王に至つては、表情・權衡皆宜しきを得た上に、沈著・篤實の趣を具へてゐる。



戒壇院多聞天

抑〻天平時代の彫刻は面貌・姿態・衣紋等の諸點に於て精妙なところのあるは勿論、その全體に於て、彫刻に最も必要な安泰といふ條

件を有してゐることが殊にその貴ぶべき點である。畢竟この安泰の趣は、精神が形體に充滿した時に始めて得られるので、これに反するものは拘定固著である。拘定固著といふのは、精神のないもの、或は精神はあつてもその活動の自由を缺いたものである。然るに安泰といふ條件は、その形がいかに複雜になつても、又いかなる活動狀態にあつても、必ずこれを具備することを要するもので、西洋に於けるその適例の一として、かのラオコーンの像を擧げれば自ら明になることであらう。彫刻に這般の安泰の趣を缺いで人をして輕佻不安の念を抱かしめるものは、決して眞に理想的な作品といふこ

ラオコーン

した僧。

天部　印度の諸神。
伎樂　吳國の風を傳へた舞樂。

鎌倉大佛　相模國鎌倉町大字長谷の淨泉寺の本尊、高さ五丈、建長四年の鑄造。

とは出來ない。天平彫刻の三作品の如き、いづれもこの點に於て宜しきを得てゐるが、とりわけ戒壇院の四天王の如くその性質の元來活動的なものに於て、よくこの條件を具へ得たのは讃嘆すべきである。又天平時代には東大寺大佛の如き巨像も作られ、佛・菩薩・天部の像の外に、肖像彫刻の類にも亦見るべき物がある。その他伎樂（くれがく）の假面などにも、優秀なものが殘つてゐる。

かくの如くその種類は甚だ雜多で、材料も銅・木・乾漆・塑土等種々な區別がある。以て當時の彫刻が、いかに大きな發達をしてゐたかを想見することが出來る。

天平期に次いで、鎌倉時代が彫刻の隆盛を極めた時代である。鎌倉期の作品として代表的な物の中で、殊に秀れてゐるのは、鎌倉大佛・東大寺南大門の仁王であらう。鎌倉大佛は頗る自然に彌陀の尊容を表して、慈悲圓滿の相好、內外人の等しく讃美するところ

運慶　康慶の子、鎌倉佛師の祖、後鳥羽天皇より順德天皇頃までの人。
湛慶　運慶の子、佛師、又佛畫を善くした。後堀河天皇の頃の人。

藤懸靜也　茨城縣の人、明治十四年生、美術批評家、國學院大學教授。

である。東大寺の仁王に至つては、當時の巨匠運慶・湛慶兩人の手に成つたもので、その濶達な手法には、眞に驚くべきものがある。

要するに、この期の像は天平時代のに比して稍寫實に進み、且手法の巧妙を增進したことは事實である。而してなほ看過すべからざることは、日本的な要素の愈〻多く顯れて來たことであらう。

然るに遺憾なことは、我が國の彫刻は、鎌倉時代を最後として、足利を經、德川期に入つて漸く衰運に傾いて、その間殆んど何の見るべき物もなくなつたけれども、偶像彫刻ならぬ金屬・木・竹・甲・角の類の工藝的彫刻が新に開拓せられて、この方面に於ては實に他に匹儔を見ないまでの著しい進歩を遂げたのである。（藝術雜話）

八　美術に現れたる日本國民性

藤懸靜也

美術は一國文明の華の開いたものであつて、また一國の文化は

その國民性を背景とするに至つて、始めてその光輝を發するものである。過去を顧みれば一國の文化にはその國民性を背景とした大きな流が明瞭に認められるものであるが、巨細に觀察すると矢張り部分的になつてゐる。或は貴族一部の文化といふ場合には多くの人々はその文化の餘澤にあづからない。そんな場合には、これを一國の文化といふことは出來ないやうであるが、古い時代に貴族政治の行はれてゐた場合、民間に何等の見るべき文化のない時には、貴族獨占の一小部分の文化であつても、それが矢張り一國の文化の經路を示すものであつて、これ等が根柢となつて、漸次下級の文化が開發されるのである。

現代に於ては、即ち我々がその社會の渦中に這入つて色々の文化の傾向を見てゐる爲に、何ういふ文化が眞にその國民性に適應すべきものか、甚だ不明瞭な場合が多い。例へば繪畫に例をとつ

て見ても、舊來の日本畫と油繪とに於て、これをもし若い者が見るとしたら、油繪の方が日本國民性に適するといふかも知れないし、中年以上の者では矢張日本畫の方が適しはしないかと考へるかも知れない。然し、それは人々の考へやうで、西洋思想に多く親しんでゐる人には、西洋畫が好まれ、中年以上で多く日本のものを見てゐる人には、日本畫が好まれ易いのである。然しながら吾人は趣味の偏した人の說を避けて、日本國民全體の上から、その文化や趣味の傾向を別に考へねばならぬ。

即ち日本畫が日本の國民性に適するといつても、支那の學問や詩文に長じたものは南畫がいゝといひ、或者は美しい美人畫が面白いといふことになる。して見れば、それ等の人々が各自自分の主張をいひ張つてゐても、それは何のとりとめもないものになつて終ふのである。が、それを過去の時代に溯つて、その時々の文化

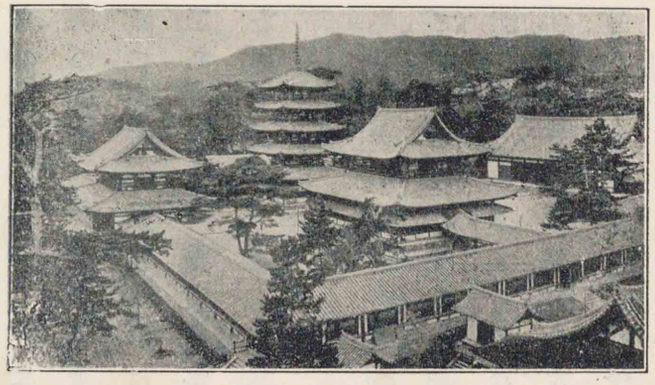
の變遷を見、藝術の變化の跡を見、而して更に現代の渾沌たる社會に對し、又藝術界に就いて考へて見ると、その間に或る一筋の光明を見ることが出來る。美術に現はれた日本國民性の如何なるものであるかといふことも、大凡は考察することが出來る。故に、世人は我が日本の古い時代からの變遷に就いて一瞥して見ようと思ふのである。

さて日本は誰しも美術國だといふことを口にし、實際さう思つてゐるやうであるが、實は我國に固有の藝術として、我が日本民族が誇り得るものは一つも持たなかつたのである。我國は常に大陸の影響を受けてゐる。寧ろ大陸文明のお蔭で日本は開けて行き、藝術も亦隆興の氣運に這入つたのである。我國に藝術が開けてから此方千三百餘年の長日月、その間幾多の變遷があり、幾多の

名家を出し、少からざる優秀なる藝術品を持つてゐるが、それらのものは、實は一つとして我が日本人の獨創ではなく、孰れも大陸文明の影響により、それを我國の趣味・風俗に適するやうに全部を改めてゐる。換言すれば、彼から受けた文化を更に日本化したものであり、この外國文化が消化されて始めて我國の特色は發揮されたのである。

さて、我國の最古の藝術品として考ふべきものは、推古朝の藝術である。これは韓半島を經由して、所謂六朝式を入れたのであるが、これはいふまでもなく、聖德太子の偉大なるお力によるので、その當時出來得る限り大陸の文明を吸收して、我國文化に盡されたといふことは、我國の今日ある基を開かれたといふべきである。この時に於ける我國文明の變化は、明治維新の時に歐米文明の影

法隆寺
大和國生駒郡法隆寺村に在る。推古天皇十五年聖德太子の創建で法相宗、本邦最古の寺院である。



法隆寺全景

響を享けて變化したのとは違つて、全然大陸文明化したものである。今日その當時の遺物として考ふべきものは、大和の法隆寺及びそこの寶物で當時の盛觀が偲ばれるのである。

次の奈良朝時代は、所謂天平の時で、誰しもその盛大なことを知つてゐるが、その當時を偲ぶものは建築に於ても、彫刻に於ても、驚くべき發達をしてゐたことを認めるであらう。これ等は唐朝の文明で、支那から直接日本に這入つたもので、益〻我が文明の基礎は確立されたのである。從つて文明は總て支那かぶれで、その服裝から總ての建築・調度類から、日常生活の樣子迄こと〴〵

く支那的である。是に於て支那思想が充分我國を支配したのである。然しこれは、その當時に於ける宮廷の一部のことであつて、我國民全體が斯樣の立派な文明を持つたのではなく、都會を一歩離るれば、無智蒙昧の國民であつたのである。が、この一部の者の文化が後代の發達の根柢をなして居る。次の平安期には遂に日本國民の自覺により、始めて我國特有の文化を生じたのは、實に我國文化の尊き所以で、大陸文明の精神を消化し得たのである。

藤原時代に至つて、日本特有の文學が起り、藝術に於ても、舊來我國に見ることの出來なかつたものが起つたが、更に鎌倉時代にこれを完成した。してみると、我日本文化の基礎は推古・奈良にあるとしても、それを純日本化して、我國獨特の精華を發揮したのは、平安及び鎌倉時代である。即ち平安時代は、宮廷及び縉紳達の文化

定朝
康尚の子、佛彫刻の名匠、大佛師の初祖。一條より後一條天皇頃の人。

運慶
康慶の子・有名なる佛師、鎌倉佛師の祖。後鳥羽より順德帝頃の人。

湛慶
運慶の子、佛師、又佛畫を善くした、後堀河天皇の頃の人。

であつたが、鎌倉時代にはもつと擴まつて普遍的の性質を帶び、そして國民的藝術の發達を遂げてゐる。彫刻について云へば、天平時代はその粹を極め、能を盡してゐるが、これ實に唐朝彫刻の模倣である。然るに平安朝の終に定朝出で、鎌倉時代には運慶・湛慶が出て寫實的な作風を以て純日本的な彫刻が出現したのである。又これを繪畫の方で考ふれば、早く佛畫の一體が、可なり精妙な域に達してゐたけれど、平安朝時代に國文學の獨立を見るやうになり、純鑑賞的な宗教的ならざるものが發達して、我國特種な繪畫が現はれてゐる。而してこの流は、平安の末から鎌倉に至つて益榮え、遂に大和繪を大成するに至つたのである。その描くところは、神社・佛寺等の緣起、或は高僧の繪傳等が少くないが、それ等の繪は、當時の實社會を率直に現はしてゐて、その題材は悉く我國のことであり、我國の風俗人情を描き現はして、純粹の日本畫の大成を遂

如拙
もと明人、畫僧、漢畫派の妙手、正平・建德頃の人。

周文
近江の人、如拙の門人、應永頃の畫僧。

雪舟
本氏は小田等揚、備中の人、畫僧、永正三年(一一六六)寂、年八十七。

狩野氏
狩野正信が創めた繪畫の一派。

雲谷
雲谷等顔、肥前の人、雲谷派の祖、正平年中の畫家。

曾我
曾我蛇足、越前朝倉氏の臣、畫の妙手、曾我の一派を創む、文明十五年(一一一四三)歿。

げたのである。

然るに、その後鎌倉の末から足利にかけて、藝術界に特種な一派を生じて來た。即ち當時の新派で支那から這入つて來た宋・元墨畫の一體で、禪宗趣味と關聯して我國藝術に一新樣を劃したのである。

雪舟

この派には如拙・周文・雪舟等の大家が出てその根本をつくり、狩野氏が榮え、雲谷・曾我の力によつて舊來の大和繪をうち壞して終つた。東山時代はこの流派の尤も盛な時で、水墨減筆の一體が旺盛を極めてゐた。而して、これ亦當時の貴族一部の趣味から出たものであつて、大和繪が日本藝術の源流をなした如くに大きなものではなか

下剋上

つた。

然るに世は戰國時代となり、舊來の貴族が下々の者から亡され、所謂下剋上で、此處に日本の社會に大變革を生じた。卽ち、尾張の國の百姓が關白太政大臣となつて人臣の榮位を極めることになつたのである。かやうな時代では、英雄・豪傑は徒手空拳を以て一國一城の主となつたので、これ等の人は天眞爛漫の趣味を發揮して、舊來の如き禪味を帶びた藝術では滿足すべきでない。而もそれ等の人々には學問がなく、支那趣味を解さないから、俗眼を奪ふやうな華麗を極めたものでなければならない。

育王山（雪舟筆）

育王山

雪舟が五十三歳の時、明の育王山（寧波から東四十四清里の所にある宋代五山の一）の風景を畫いたのが此水墨である。

光琳筆

これは水邊梅樹の圖、竪五尺八寸横六尺三寸五分の二枚折で、紅白二色の梅樹に流水を現はしたもので、その色彩と云ひ、構圖と云ひ、當に光琳の代表作である。

此處に於てか、極彩色の花鳥動物などが描かれ、又當時の社會狀態を描いた新しい風俗が起つたのである。

されば桃山時代から江戸時代の初期は卽ち日本の文藝復興の時期で、その後は更に日本趣味の發達した時代である。德川三百年の間は、僅に長崎の一角から外を見てゐたに過ぎないので、內地は益〻日本趣味に榮えた。而して色々の流派が生じ、藝術の燦爛たる花の時期となり、我が日本藝術の盛な時代を現出したのである。

光琳筆

光悅に始まり、宗達・光琳を經て抱一に至る一派の如きは、その範を大和繪にとり、更にこれを醇化したものである。又近世風俗畫の一體の如きは、矢張範を鎌倉時代の繪卷物にとつて起つたもので、更にそれが江戸趣味といふ特種なものとなつて、浮世繪版畫に繁盛したのである。その他圓山・四條の諸派も、德川時代に於ける特種な產物であつた。僅に長崎から這入つて來た西洋畫・南宗畫の一體もあるが、德川時代は實に日本藝術の燦爛・華麗の花の開いた時である。

明治となり、西洋藝術の影響を享け、此處に日本藝術の上に一大變革を來したが、日本藝術は過去數百年の歷史を持つてゐるので、一時は外來のものに傾いたが、また遂に日本的の趣味にかへり、更に歐米の特長をとつて、これを加味したものが出來た。現代は各個人の考に依つて思ひ〳〵の藝術をなしてゐる。舊來の日本畫

光悅
本阿彌光悅・畫家・刀劍鑑定家・書を善くし陶器製作・蒔畫の名手、寛永十四年、（一二一九七）歿年八十一。

宗達
俵屋宗達、能登の人・畫家、寛永年中の人。

光琳
尾形光琳・京都の人、畫家・漆工の名手、光琳派の祖・享保元年（一三七六）歿、年五十六。

抱一
酒井抱一、姫路の人、畫家、文政十一年（一四八八）歿、年六十八。

圓山派
畫家應擧から出た寫生を主とした畫風。

四條派
寛政の頃、應擧の門人松村月溪（吳春）が創めた繪畫の一派。

も新來の油繪も共に榮えてゐるが、然し、この油繪の一體も日本に於て描かれる以上は日本の特色を發揮すべきで、外國のものとは違はねばならぬ。實に現代に於て、既に油繪が日本的趣味に傾いたものが少くない。また日本畫も舊來のものとは違つて面目を一新した。

之を要するに、國民性はその國民の住する國土に深く根ざして居るのであつて、總ての美術、總ての文化は皆その國土と特殊な關係を結んで居る。美術殊に繪畫は、自然の模倣を離れ難いので、益、其の國土と密接な關係を持つのである。これまでの傾向をみると何時でも外來のものが加はつて、こゝに新しい生命を加へられたが、現代のやうに外來の刺戟の多い時には、何れを何うと定めることは頗るむつかしいが、やがてこの刺戟から新しいものが生れるのである。さうしてこれが、また國民性を代表することになる

のである。

されば國民性の如何なるものかを簡單に説明することは、容易でないとしても、美術にあらはれた本流、例へば大きな畫派の變遷の上には、よく國民性の移り變りを窺ふことが出來る。即ち美術の上に形として表はされて居るから、國民性についての考察に多大の便利を與ふることとなるのである。

（日本國民性の研究）

試驗　九　萩　大　名

大名「罷り出でたるは隱れもない大名。此の中御前に詰めてあれば、心が何とやら屈して御ざる。太郎冠者を喚出し、何方へぞ遊山に參らうと存ずる。在るかやい。　冠者「御前に。　大名「汝をよび出すは別儀ではない。何方へぞ遊山に行かうと思ふが、何とあらう。　冠者「は、內々は御意無うても申し上げうと存ずる所に、一段で御座

りませう。　大名「好からうな。　冠者「は。　大名「何と、西山・東山はいつもの事、樣子の違うた所へ行きたいが、何處もとが好からうな。　冠者「誠に御意の通り、西山・東山はいつもの事で御ざる。されば、何處もとが好う御座りませうぞ。はゝ、思ひ附けて御座る。これよりも下京邊に、心やさがたな御方が御ざる。殊の外の庭好で御座る。これへの御遊山が好う御ざりませう。　大名「おう、これが一段好かろ。それへ向けて行かうぞ。　冠者「は、さりながらこれへ御座ればお歌をなされねばなりませぬ。　大名「それは如何樣な事を讀むぞ。　冠者「三十一文字の言の葉で御座る。　大名「あゝ、こりやなるまいに。　冠者「は、申し上げまする。　大名「何とした。　冠者「某上京邊を通つて御ざれば、若い衆の見物に御座らうとあつて、萩の花について、句づくろひをなされたを聞いて參りまして御座る。御前に敎へませう。　大名「やい、冠者。其の庭にも萩の花が有らうかな。

冠者「殊に亭主好きまするのが萩でござりまする。　大名「ふん、其の儀ならば、急いで教へい。　冠者「畏つて御座る、『七重八重九重とこそ思ひしにとへ咲出づる萩の花かな。』と申す事で御座る。　大名「ふん、してそればかりか。　冠者「はァ。　大名「いや、是程の事ならば、讀まう程に、急いで來い。　冠者「畏つて御座る。　大名「來い〳〵。　やい冠者。　して今の歌のいひ出しは何であつたぞ。　冠者「忘れさつしやれて御座るか、『七重八重』で御座りまする。　大名「おう、それぢや。　して其の後は。　冠者「申し、殿樣これではなりますまい。　大名「おう、なるまいか。　急いで戻れ。　冠者「申し、殿樣。　大名「なんぢや。　冠者「さりながら、物によそへたら覺えさつしやれませうか。　大名「よそへ物によつて、覺えうず。　冠者「卽ち扇の骨によそへませう、『七重八重』と申す時に、七本八本廣げませう、『九重』と申す時に九本廣げませう、『とへ咲き』と申す時に、皆廣げませう。　大名「おゝ、これは好いよそへ

折檻

たのうだ人

物ぢやわい。　して又其の後が有るぞよ。　冠者「はァ、これは尙よそへ物が御座る。　大名「それは何によそへるぞ。　冠者「卽ち身共をば、臑脛ばかり伸びをつてと、厚く折檻なされまする。其の脛をば思ひだつしやれませ。　大名「おうこれが一段ぢや。來い〳〵。　冠者「疾と御座りました。卽ちこれで御座りまする。それに待たしやれませ。　大名「やい、冠者。亭主に、大名ぢや程にこれへ迎に出よといへ。　冠者「畏つて御座る。

萩大名狂言繪

冠者「御亭、內に御座るか。　亭主「いえ、冠者殿。何として御座つたぞ。　冠者「その事で御座る。たのうだ人が此方の庭をきゝ及うで、見物にて御座るほどに、表へ迎にてさつしやれい。　亭主「心得まして御

座る。はつ、これは又見苦しい所へ、御腰掛けられうと御座りまする。忝うこそ御座りますれ。　大名「やい冠者、ありや亭主か。　冠者「はア。　大名「御亭、無案内におぢやる。　かう通りまする。　亭主「はつ。　大名「やい、太郎冠者床几々々。　冠者「はつ。　大名「やい、亭主にこれへでられいといへ。　冠者「はつ。　御亭、これへでさつしやれい。　亭主「畏つて御座る。　大名「御亭々々。　聞及うだよりも、甚う庭が見事でおぢやる。　亭主「はつ、この中は手入も致さぬによつて、甚うむさうに御座りまする。　大名「否々、さうもおぢやらぬいの。　なう御亭。あの向うな松は女松でおぢやるか、男松でおぢやるか。　亭主「いや、あれは男松で御座りまする。　大名「ふん、甚う見事でおぢやる。　やい、冠者。見事ななな。　冠者「はつ。　大名「あの左の方へすつと出た枝を見たか。　冠者「中々、見まして御座る。　大名「鋸おくせい引切つてしんに立てうに。　冠者「はゝ。　大名「はゝ。　御亭、不案内におぢやる。

亭主「これ〳〵。　冠者「何でか御座るぞ。　亭主「いや、あの殿様におつしやれませうには、『孰れもの御腰掛けられては、あの萩の花につけて短冊を掛けさつしやる。　殿様にも遊ばしませい。』とおつしやれい。　冠者「心得まして御座る。　申しまする。　大名「何とした。　冠者「亭主申しまするのには、『孰れもが短冊をなされまする程に、花につけてお歌をば詠まつしやれい。』と申しまする。　大名「亭主にこれへ出よといへ。　冠者「はつ。　大名「御亭、只今は歌を詠めとおつしやる。　久しう詠まぬが、何とおぢやろ。　一つ詠まうか。　亭主「遊ばしませう。　大名「かうもおりやろか、『七重八重九重とこそ思ひしにとへさき出づる萩の花かな。』　亭主「あゝ、これはいかうでけさつしやれて御座りまする。　大名「亭主、身は歌よみで居りやるいの。　亭主「あゝ、いかうでけさつしやれて御座る。　大名「やい冠者。　亭主がでけたてて、いかう喜ぶは。　汝は何方へぞ行け。　暇を出す程に、

緩りといて、寛いで來い。　冠者「畏つて御座りまする。　亭主「只今短冊に書きまする、も一度吟じさつしやれませう。　大名「おう心得ておじやる。『七重八重九重とこそ思ひしにとへ咲き出づる、出づる。』いや、冠者奴は、どこもとに居るでぢやまでい。　亭主「申し、殿樣。　御歌に冠者はいりますまい。急いで後を詠まつしやれませい。

大名「して、短うおぢやるか。　亭主「なか〳〵。　字が足りませぬ。

大名「したらば、出づるを幾個も書いて置きやれ。　亭主「いや、それではなりませぬ。　大名「はて、冠者奴が早う戻り居らいで。　亭主「申し、殿樣。急いで詠まつしやれませい。　大名「こゝな奴は、諸士に手を掛けをつて、憎い奴の。　亭主「でも、字が足りませぬ。　大名「あゝ、思ひつけたわ。　亭主「何と。　大名「ものと。　亭主「何と。　大名「太郎冠者が向臑に、某が鼻の先。　亭主「何でも無い事。とつとと言はしませ。（狂言記）

狂言記　五卷。作者不詳、室町時代に行はれた狂言五十種を集めたもの。

一〇　能狂言

芳賀矢一

芳賀矢一　福井市の人、慶應三年生、國學者、文學博士、國學院大學々長。

猿樂の能と離るべからざる關係あるものは、能の狂言なり。猿樂の名は、滑稽の所作といふ意味にて既に中古の物語に見え、神社に奉仕せし猿樂の人が、猿樂の能の役者となりし歷史より察すれば、猿樂の名はむしろ狂言に屬すべきものにして、後に發達せる能樂の爲に、その名を奪はれたるものなり。しかも能樂發達の後と雖も、尙これと密接の關係を有し、今日に至るまで、能樂興行の際には、必ずその中間に狂言を演ず。一方能樂の悲劇的なるに對して、喜劇的性質を帶びたる狂言が、その中間に插まれ、相錯綜して一日の歡を悉さしむるは面白き對照といはざるべからず。然れども狂言のあくまで能樂の附屬物の如き位置に落ちたるは、その性質上及び事實上より、しかあるべき勢あればなり。蓋し能樂に於て

いやちこ

は、古英雄・古美人を材料として懷古の情を起さしめ、神明・佛陀の功驗を示して、神々しさ・いやちこさを感ぜしむるに反し、狂言に於ては、無學なる大名・破戒の僧・似而非修驗者等を主人公として、一方は眞摯に、一方は滑稽に、一方は尊嚴の念を起さしむべく、一方は輕蔑の念を起さしむるに足ればなり。　又謠曲は古來の秀歌・名句を引用し、佛典の教義を說き、章曲に於ても頗る學者的なるに反し、狂言は當時の平話を以てこれを綴り、章句の上にも學識を要せず。　又その章曲を歌ふにも、謠曲は音樂的リズムを諳んじて曲節に合せざるべからず。　狂言はもとよりこのことなし。　舞容に於ても、能樂は希臘の古劇の如く、舞方の上手は卽ち役者にして役者としての技術には專門の技術を要すること甚だ大なるに、狂言は比較的單純なり。　又狂言は能の數番の中間に挿入せらるゝが爲に、その時間は役者の休息の爲、又は扮裝を直すが爲に用ひられ、ことに間

附庸

地の文

の狂言の如きは、前シテが樂屋に入りて、後シテの裝束に改むる間に用ひらるゝが如き情態なるを以て、勢、能樂に對しては附庸の地位に立たざるべからず。　希臘の古劇を察するにも、喜劇・悲劇の根本は相同じきが如く、我が能樂・狂言も亦神事に起因して、兩面に發達せしこと甚だ相似たりと雖も、喜劇的方面を代表せる狂言は、永く能樂の附庸となり、文安田樂能記・紀河原勸進能記等に於て、早く已に能樂の間々に演ぜられたるを見る。　唯その當時の言語を以て記して、全文悉く對話より成り、毫も地の文を插まざるは、謠曲に比して一層純劇詩的性質を有せりといふべく、後世の脚本の根源をなせりといふべし。

狂言の作者及び製作の年代等の不明なるは、なほ謠曲の如し。千篇一律にして大抵同一模型の蹈襲なること、一時の製作に非ずして、時代を逐うて漸次に增加せしならむと想像し得べき事、亦相

同じ。而してその國民間に流布せる傳說を本にせるに於ても、亦兩者相似たり。但し謠曲は英雄・高僧等の偉人傳說に基づけるもの多く、狂言は單純なる童話を資料とせること、その相違の點とす。卽ち謠曲はザーゲを根本とし、狂言はメルヘンを基礎とせる觀もあり。狂言已に能樂の附庸たるを甘んずるや、謠曲に擬して滑稽を仕組みたるものも尠からず、通圓の如き、老武者の如き、若市の如き、その適例といはんか。通圓は宇治の茶坊主なれば、賴政に似せて作りたるなり。老武者も若市も、修羅能に擬して作れるなり。皆一種のパロディなり。「このわたりの愚僧なり。」と名告らせ、「貝をも持たぬ山伏の、道々嘘を吹かうよ。」と云ふ如き、謠曲の摹倣に非ざるはなし。舞容も科白も、謠曲に於ては尊嚴・莊重の感を惹起すを主眼とし、狂言に於ては輕快・飄逸を目的とす。この對照ありて能樂の全美をなすなり。謠曲に通ぜる特性は說教なり、教訓なり、佛陀・神明に關し、歌道・故實に關し、その一草・一木の由來・緣起をも敍べて、衒學的に且說明的なり。狂言は寧ろ之を知らざるを以て滑稽とし、煩瑣なる歌學・故實、一切の祕事・祕傳は皆嘲笑の材料に取られたり。この見方よりすれば、狂言は正しく一種の諷刺的文學の性質を帶びたりといふべし。滑稽と諷刺とは、もとより甚だ相近きものなればなり。

ザーゲ　獨逸語、傳說の意。
メルヘン　獨逸語、童話の意
パロディ　英語、滑稽摸擬文の意。
科白
衒學的

二　元祿の三文豪

藤井紫影

江戸時代に於ける文化の興隆を說く者、先づ指を元祿に屈す。實にや、元和偃武よりこゝに七十年、世は兵革の響を忘れて、漸く泰平の光に浴し、草創蕪雜の機運は、正に轉回して整理修飾の時代となり、數十年間、人々の胷奧に蟄伏鬱積したりし精神的需要は、種々の形態を取りて、今や、春風膏雨の時を得、爭うて蕾を破り、千紫萬紅

（國文學歷代選）

藤井紫影　名は乙男、兵庫縣の人。明治元年生。文學博士、京都帝國大學教授。
元和偃武

目もあやに咲きいでぬ。

元祿は、文藝復興の時代にして、また、その發生の紀元たり。かくて、その新に起れるものは勿論、再び興りしものも、皆、清新の風に富み生氣潑剌たり。元祿文藝の貴ぶべきは、卽ちこの點にあり。時世の要求は、文學技藝に、この約束を奉ずべく、諸道の豪傑を指麾驅使したるものの如し。

下河邊長流　大和の人、國學者、貞享三年（一六四六）歿、年六十三。
契沖阿闍梨　大阪曲珠庵の住僧、國學者、元祿十四年（一七〇一）寂、年（六十二）。
戸田茂睡　江戸の人、歌人、寛永三年（一六二六）歿、年七十八。
伊藤仁齋父子　京都の人、共に儒者、仁齋は寶永二年（一七〇五）歿、年七十九。子東涯は元文元年（一七三六）歿、年六十七。
荻生徂徠　江戸の儒者、享保十三年（一七二八）歿、年六十三。

國學の下河邊長流・契沖阿闍梨・戸田茂睡・儒學の伊藤仁齋父子・荻生徂徠、繪畫の菱川師宣・英一蝶・尾形光琳など、孰れも皆この特色を發揮したる大家・鉅匠ならざるなし。

この時に方つて、中流以下の社會を相手とする俗文壇に三偉人を出せり。三偉人とは誰ぞや。浮世草紙の井原西鶴・俳諧の松尾芭蕉・淨瑠璃本の近松門左衛門是なり。この三人、時を同じうして、各、特殊の方面に旗幟を飜し、名聲籍々として天下を風靡せり。西

鶴が浮世草紙に得意の諸作を出しし貞享三年は、芭蕉が貞門・談林の舊竇に安んぜずして、古池の一句に正法眼を開き、近松が竹本義太夫の爲に始めて出世景淸を作りし時なり。この時、西鶴四十五、芭蕉四十三、近松三十四。年齡事業、兩つながら西鶴を以て先輩とすべきも、爾來、彼の筆を武家物・町人物に轉じたるより觀れば、この三人が、期せずして轉化の時期を同じくせるも奇なりといふべし。

菱川師宣　安房の人、浮世畫家、正德四年（一七一四）歿、年七十七。
英一蝶　本姓多賀、大阪の人、畫家、享保九年（一七二四）歿、年七十三。
尾形光琳　京都の人、畫家・漆工の名手、享保元年（一七一六）歿、年五十六。
竹本義太夫　竹本筑後少掾、攝津の人、義太夫節の元祖、正德四年（一七一四）歿、年六十四。
騷客　西山宗因　肥後の人、檀林派俳諧の祖、天和二年（一六八二）歿、年六十四。

蕉風俳諧の趣味は幽寂・閒適を旨とす。浮世の利慾に眼を光らし、俗界の歡樂に足を空なる京阪の町人、いかでかこれに滿足すべき。芭蕉が江戸を中心として、風化を四方に及ぼしたるも、その門徒は、多く士林・桑門の騷客より成れり。されば、彼をして、蕎麥と俳諧とは上方の風土に適せずと放言せしめたるも、亦故なきに非ず。談林風は、詼諧を旨とし新奇を競ひ俗耳を喜ばしむること、遙に蕉風の上にあり。京阪は、西山宗因起りてより、久しくその根據地た

りしも、流行時移りて、漸く世人の厭倦を招けり。西鶴、談材の驍將を以て、浪華の重鎭たり。好んで人事を詠じ、小說的著想の佳句、往往誦すべきものあれども、西鶴の西鶴たる本領は浮世草紙、にあり。近松も亦俳諧を西鶴に問ふと稱せらる。されどその句殆ど傳はらず。この二人は固より芭蕉と俳諧を比すべきに非ず。唯、二人者の著作中、その趣味・文法に於て多少俳諧の影響あるを注目すべしと爲す。西鶴、字治加賀掾のために『曆』の作あれど、淨瑠璃に於て、近松の敵に非ざるや言ふを俟たず。

この三子者、各〻獨特の長技を揮うて、こゝに、絢爛たる元祿文藝の花は、東西の野に咲きみちぬ。芭蕉の清淡、西鶴の放縱、近松の溫雅、その人となりを異にするに隨うて、文もまた高雅・輕雋・秀潤の差あれども、俱に一代の粹たるを失はず。元祿の文壇、國學に儒學に、豪傑の士乏しからざりしも、この三人微りせば、その落莫想ひ見るべ

三四三）歿、年七十八。驍將

字治加賀掾 淨瑠璃節の名手、寶永八年（一三七一）歿、年七十七。

輕雋

きなり。

井原西鶴 大阪の人、小說家、元祿六年（一三五三）歿、年五十二。

光明皇后 御名光明子、聖武帝の皇后、天平寶字四年（一四二〇）崩、御年六十。

昔おもふ むかし思ふ草の庵のよる雨に、涙な添へそ山ほとゝぎす。藤原俊成（新古今集）

二　孝と不孝の中に立つ武士

井原西鶴

清貧は恒に樂しみ、濁富は恒に愁ふと、光明皇后の御殿の屛風に書き置かせ給ひしとや。いづれ世の人心ほど種々なるものはなし。駿河の富士さへ煙は變り、雪となり、風となり、雨の時は眺め絕えて、折節五月闇、道中姿の合羽も物佗しく、袖の湊の故鄕思ふ筑前の侍、東武の勤務に下られしが、日數定まつての旅急ぎ、安部川の夜渡り、瀨に變り行く石道の難儀、やう〳〵宿にさし懸り、供廻にも言葉をかけ、聞いたか今の蜀魂、昔おもふ草の庵に、灯火見ゆる所にて消えたる提灯を點せと、小家がちなる戸ざし氣をつけて行くに、西側の人家に聲高なる所あり。火を一つと所望すれど、なか〳〵聞入れずして、親子爭論うるさし。母の聲言分と聞えて、疊を叩き立

て、今此様に錢銀持つて、人も大勢つかふは誰が蔭と思ふぞ、御方のわせてから汝が志が變つて、朝茶さへ飲ませぬ不自由を見せける。これ御方、人には應報のあるものぞ。嫁の古いのが此様婆になるものぢや。千年も顔に皺のよらぬものではないぞの、今朝も眼が疎いと思うて、何處の國にかあらうぞ。莨盆足で踏みだして呑めとは、餘り酷い仕方なれども、あゝ今日も知れぬ老年のことぢやと、思ひ流して堪忍したといふ。

井原西鶴（好古類纂所載）

嫁は口噪がしく、此方も大方なる邪がよい。これ此の左の手にてさし出したといふ。扨は、あり様の手は、紫の革踏皮穿いて、緋縮緬の脚布召してゐるか。これはよい手が見ゆるわいの。この婆が眼が見えぬと想やるか。針のみゝず

井原西鶴筆

井原西鶴筆　西鶴
しらゝくし若子の寢覺め時雨かな。

なりとも通して見せむ。尻も結ばぬ絲を謂やるな。それは後へ抜け事といへば、息子は暴けなき聲して、先づあり様の無用なる長命、娑婆塞に一つも益の無い事なり。其の呼吸の通ふ首縊つて死なれたが、浮世の隙があくといふ。これを聞き棄てて行くに、其の並びにこれぞ雨夜の物語、品々言葉の花を咲かし、酒くみ交す樂しみ、然も廢屋にて内も見え透きける。さし覗けば割松明して八十餘歳の老人をいさめ、雨も溜らぬ板廂、漏桶も限りあれば、亭主は菅笠被ぎ、破れし傘を彼の親仁にさしかけ、それが女房は鍋蓋被ぎ、雨を凌ぎ、缺徳利にはした酒、肴に茄子の淺漬、燒味噌ならで無くて、孝行の志を酌交しける。此の親是を滿足して、世にある人の玉の臺

井原西鶴筆

も、我が竹簀も樂しみ更に變ることなし。汝は子なれば恩を知る道理もあり。妻はもと他人なるに連添ふよしみとて、我に孝を盡し、家貧しき渡世を構はず年月の經營、さりとは何の世に此の恩をおくるべき。夫婦手業の紙子の揉賃、骨を僅少の事に碎く、切めては其の手を扶けんと思ふに、足起たざれば是非なしと、涙泄る雨を爭ふ。筑前の侍此のあらましを立聞きして、同じ所の人心、最前の不孝者と、これ格別の違ひあるを感じ、提灯の火を借りて、主人は乘掛より下りて其の宿に入つて、われ久しく浪人せしうちに、世を渡る種とて、種々工夫仕出して、式の如く紙細工を得たり。就中紙絹に絞を附くる事、さのみ力をも入れずして、物の見事なる縮緬にな す祕密、矢の竹にまき掛くる仕出し、懇に傳へて通られける。是は と始めて色品變へて見せけるに、此所の名物と成つて諸國に廣まり、次第に分限となり、財寶不足なく、一人の親を心の隨意にもてな

近松門左衛門
杉森信盛、號は巢林子、戲曲作者、享保九年（二三八四）歿、年七十二。

坊門清忠
藤原清忠、俊輔の子、延元三年（一九九八）卒。

卷末地圖參照

卷末附圖參照

獄門

し、彼の女房も昔の木綿京小袖に著替へて、數多の婢・腰元、其の身は乘物の窓より、世間の移り變れるを眺め、活計の種は盡きず、人のほめ草となりぬ。

（俗つれ〴〵）

一三　小山田太郎高家　一

近松門左衛門

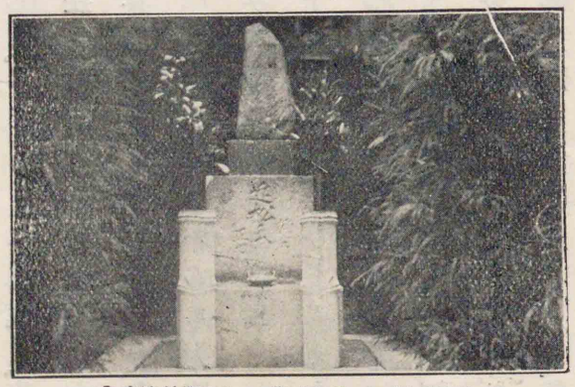
坊門宰相清忠が內通故、湊川の合戰破れ、楠正成討死すといへども、總大將新田左中將義貞、西の宮に御陣を召され、士卒を壞け給ひければ、馳集つて御方の勢四萬餘騎とぞ聞えける。侍所長濱六郎左衞門、松明持たせ陣屋をめぐり、囚人四五人搜めさせ、義貞の御前にひつする、「彼奴ばら、今夜近邊の田畠を荒し御馬の飼料に殘せし青麥を盜み刈取りしを搦め取つて候ふ。見せしめのため首切つて、獄門にかけ候はん。」と言上す。義貞聞し召し、「抑、今度の合戰は朝敵を亡ぼし、民安全になすべしとの勅諚なれば、賣買耕作に妨げ

ず。田畠の一粒をも刈取る者は急度刑罰すべきよし諸軍勢に相ふれ、所々に立てたる高札を背きしは、敵方のあふれ者か但し盗賊か。白狀させよ。」と御諚ある。

近松門左衛門

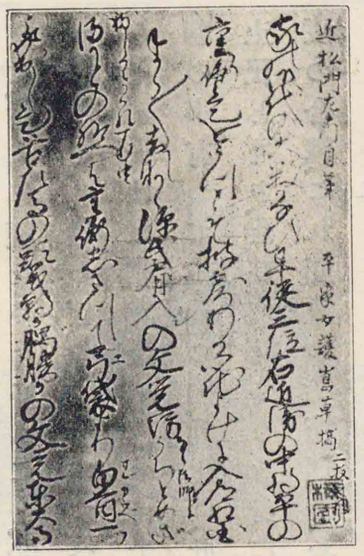
遙のあとに年の頃二十餘りの女房、盗み取つた青麥を、背中に縛り付けられて、恥かしげにぞ泣き居たる。義貞つく〳〵御覽じ、「彼が體、盗すべき者とも見えず。子細ぞ有らん。まつすぐに申すべし。」と有りければ、女ちつとも騷がず、「はあゝ子細と申して麥を盗みしより外の子細もなし。はや〳〵法に行ひ給へ。」と恐れもなげにぞ答へける。義貞猶もいぶかしく、「子細をいはずんば往還にさ

らし、諸人に恥を知らすべきぞ。」との給へば、女はわつとばかりにて、暫し涙にくれけるが、「あゝ是非もなや。盗みをするも夫の恥包まんと思ふ爲なるに、諸人に面をさらさんこと、恥を招くか情なや。然らば包まず申すべし。わらはが夫は足利尊氏相傳の侍士なるが、聊の事有つて主・親の勘當受け、此の國の土民となり、忍びて暮すうき身にも、此の度の合戰、これ屈竟の時節到來、おゆるしなくとも、戰場に馳加はり、分捕り功名を顯し、主の不興、父ごの勘當ゆるされんと、思ひ定めし我が夫の、心はやたけにはやれども、鎧一領あるにこそ。手綱ゆりかけのつたりとも、一町もとばぬ野飼の痩馬、住むもわび



近松門左衛門墓　（大阪妙法寺内）

しき藁屋の窓より、鯨波の聲・矢さけびの音、かすかに聞ゆるその時は、齒ぎしみしての無念がり、傍で見るさへ胸せかれ「己やれ二世とかはした大事の男、此の儘にては果させじと、さま〳〵に思案し、麥を盗んで兵糧の、びんよくば陣所に忍び、寢入つたる軍兵原が太刀・物の具、思ふまゝに盗み取り、我が夫に打著せ、みづからも刀脇ばさみ、夫婦諸共軍して、名を後代に上ぐべしと、思ひしことも



近松門左衛門筆

いたづらに、かゝる縄目にあふことも、夫の武運の拙き故、子細と云ふも此のあらまし、とてもながらへ果てぬ身ぞ。憂き物思ひせんより、はや〳〵殺して給はれ。なう御慈悲なるは人々。」と、聲も惜しまず歎きしは、目を當てられぬ風情なり。

義貞もやゝ落涙有り、「おゝあつぱれ武士の妻にて有りけるよ。命がけの盗みして、夫の武勇を勵ます心、感じても猶餘り有り。罪をゆるし、義貞が著捨の鎧・太刀をもそへて取らすべし。それ〳〵。」との給へば、御召替の錦の直垂、金作の一こし、女が膝にぞ置かれける。「さあ〳〵 歸つて物の具きせ、明日の合戰には、義貞が陣に向つて打つてかゝれ。敵ながらも見物せん。はやとく〳〵。」との給ひて、いましめの縄を解かせらる。女はあつと頭をさげ、「情有る御大將、有りがたや御恩の程、何と報じ奉らん。さりながら、我が夫はまさしく尊氏公の御家人、すは合戰に及ばんとき、今賜はりたる鎧を著し、太刀持つて義貞公に向はるべきか。用捨しては尊氏への不忠、一矢仕らば恩を知らぬ弓取と、末代迄の笑ひ草、御恩は却つてあだとなる。只御慈悲にはみづからを盗み一ぺんの科に落し、はやはや殺して給はれ。」と、首さしのべて泣き居たる、心の中こそすゞ

しけれ。義貞猶も感じ給ひ、「おゝ其の心を察してこそ、わざと最前より夫が假名、實名をも尋ねず、互に知れず知らぬ相手、名乘つて勝負を遂ぐる時、いづれに用捨の有るべきぞ　さ程のことを汝等に教へらるゝ義貞ならず。いらざる詮義に時遷れり。はや〳〵歸れ。」と太刀、鎧、手づから取つてたびければ、おし戴きわきばさみ、「お情はこれ迄、明日の合戰には、夫婦諸共心をあはせ、恐れながら御運によつて御首を賜はることも候ふべし。おゆるしあれ御免あれ。」と、御前を罷り立つか弓、ひきはかへさじ武士の、妹背の義理ぞ頼もしき。

西の宮　攝津國西宮市。

生田の森　今神戸市の東部生田神社の南。

既に其の夜も明け行けば、勝に乘つたる尊氏の軍勢、雲霞のごとく、湊川より打つてかゝる。義貞も西の宮より取つてかへし、生田の森を後にあて、入り亂れ攻戰ふ。太刀のつば音、ときの聲、いかなる修羅のたうじやうも、これには過ぎじとおびたゞし。小山田太

郎高家は心ばかりは春の花、身は埋木の力なき野飼の馬の繩手綱、ちぎれ具足もあらばこそ。あまつさへ女房の夕べに出でて歸らぬは心もとなき氣遣ひさ。足にまかせてこゝかしこ、所在を尋ね求塚、小松原より振返れば、こはいかに遙向ふの山々に、中黑のはた二つ引兩、巴の旗も輪違ひに、東へなびき西へなびき、磯山風に飜して、馬煙矢さけび、天に響き地に滿ちて、新田・足利の國爭ひ、今を限りと見えたりける。「あゝうらやましき殿原が合戰や。せめて古具足の一領もあれかし。取つて投げかけ、何百萬騎が中なりとも只一揉に駈破り、兩陣の目を驚かさん物を。何をいうても浪人の、紙子頭巾に鋤一丁、思ふに甲斐のあらばこそ。貧は諸道の妨と、世のことわざも我が身の上、ふゝ無念くち惜しや。」とこぶしを握り牙を嚙み、男泣にぞ泣居たる。

求塚　三ヶ所ある。一は東明、一は住吉村御田、一は味泥にある。各十數町を距てゝゐる。

かゝる所へ女房は、危き命をまぬがれ、ふつてわいたる太刀・鎧、夫

に著せて悦ばせんと足早に歸りしが、「やあこちの人爰にか。此のなりは何ぞいの。さぞ待兼ねてで有らうと思ひ、いきせきして戻つた。これわしぢや、女房ぢやが、なぜに物いはんせぬ。氣合が惡いか高家殿。」と、抱き起せば涙を押へ、「おゝ氣合もどうでようはない。やれ女房、あの向ふの山々に、入り違ふ小旗を見よ。今ぞ合戰の眞最中、あの軍中には主君尊氏公・父前司殿もおはすらん。正しき主君、老いたる父が天下分目の晴軍と、命を惜しまず戰ふを、子の身として安閑と見物して日を送る、これが無念に有るまいか。」と、いはせも果てず、「これ〳〵〳〵 泣事はもういらぬ。これ見さんせ。」と太刀・鎧投出せば、高家横手をちやうと打ち、鎧引きよせつく〴〵見て、矢留り金物・押著板・發傳・高紐・上卷付、太刀は鳥首・兵庫ぐさり、「むゝこれは大將の拂物、大抵では賣るまじきが、但し損料でばしかつたか。」といへば、女房くつ〳〵と吹出し、「あゝつがもない。日がな

矢留り金物　鎧の胸板の上の金具。
押著板　鎧の後の肩にあたる所。

一日たま綿くつて、錢廿取るや取らぬもの、八百年の手間賃でも中中買はるゝ物かいの。馬の草もなき故に、夕べ義貞の領内の、青麥盗み刈りたるを、番の者に搦められ、殺さるゝ筈なるを、さすが義貞は憐を知つた大將、夫の身の上聞屆け、命を助け其の上に此の太刀・具足、さあ早う出立つて、手柄してござんせ。」と、わたがみ取つてきせんとす。高家つきのけ、「むゝ誠に義貞は五常を守る名將、物の憐を知ること、敵味方の隔なき人と聞く。義貞に貰うた鎧を著し、直に義貞に打つてかゝらんこと心よからぬ軍なれば、思ひ切つたる功名も成るべからず。えゝよしない情を受けたり。」と、くやみ顏にぞ見えにける。えゝこなたとも覺えぬ。義貞程の大將が、さもしい返報受けようとて、何の情をかけられう。それ故こなたの名も問はず、用捨なくわれを打てと、詞に念を入れ給ふ。義貞の目の前、此の具足著て働き、あは能くば義貞をしてやらうと思ふ氣はな

發傳　弓手の草摺の異名、但し近世の稱。
高紐　鎧の胴の釣紐、肩にある。
上卷付　鎧の後逆板に在る。
鳥首　太刀の柄頭の金具を鳥の頭に造つたもの。
兵庫ぐさり　太刀の足金の緒を鎖にした物。
わたがみ　鎧の肩にあたる所。

いか。えゝおくれた人や。」とせきければ、「むゝ分別した合點有り。一度著して見せずんば、其方をかたりなどとさみせられんは男の恥、さあ小山田太郎高家が出陣。」と、鎧取つてなげかけ、上帶高ひも小をどりして、引きしめ〳〵太刀わきばさみ、立ちあがれば、「おゝあつぱれ武者振よい男、わしも馬に草かうて追付けそこへ。」と立歸れば、「これ討死は軍の習、いきて歸れば仕合、先づ今生の暇乞ひ、必ず泣くな。」「これ武士の妻に成るからは、そこは合點、死出の山路の一二のかけ、おくれはせまい。」とわかれしは、はや修羅道の先陣と、後にぞ思ひしられける。

一四　小山田太郎高家　二

近松門左衛門

傾く日陰西の宮、大手の合戰入り亂れ、人馬四方に馳せちがひ、喚きさけぶ其の聲は、山を崩すが如くにて、官軍既に戰ひ破れ、堪へつ

かゞせ　案山子。
弦走　鎧の胴。

べうは見えざりけり。大將義貞只一騎、返し合せ〳〵十六度迄驅散らし、御身をきつと見給へば、數か所の矢疵、馬鞍に立ちし矢は、枯野の薄に異ならず、えゝ軍の勝負今日に限るべからずと、追ひくる敵をきり拂ひ〳〵、求塚の小松原に心靜にうち給ふ。高家それぞと見るより大音上げ、「大將軍と見奉る。正なう後を見せ給ふ。引返して勝負あれ。」と追つかくれば振返り、日本一の義貞に聲をかくるはこざかしと、鎧にかけてはつたと蹴散らし、たゞよふ所をひらりと飛下り、片手をのべ一突つけば、木枯にかゞせのたふるゝ如くにて、横なげにどうとふす。義貞すかさず弦走にのつかゝり、首をかゝんとし給ひしが、鎧出立ちつく〳〵御覽じ、「むゝう天晴おのれはしれ者哉、義貞にやすゝ〳〵と組みしかれん力とは覺えず。何として組みしかぬ。定めて子細あるべし。さりながら汝が主の尊氏を組伏せたらんはしらず、汝ごときの侍士を五十首・百首取つて

も、さのみ義貞が手柄本望とも思はず、さあ子細を語つて名のれ名のれ。」との給へば、「こは御諚とも覺えず、いかに大將なればとて、わざと敵に組みしかるゝ者や候ふべき。足利尊氏の家の子小山田前司高春が一子、小山田太郎高家、不足の敵と思しめさば、只首打ちすてさせたまへ。」と兩手をゆるめて働かず。「いや〳〵此物の具は夜前女に與へし義貞が著捨の鎧、扨はその夫よな。恩を報ぜん志しほらしさやさしさよ。さりながら天下にくらぶる義貞が命、僅の鎧一領にて助からんとてはとらせぬぞ。主・親の勘當につき望有る者ときく、目を驚かす功名して本望を達せよ。只今にても跳返し、義貞と今一勝負致せよかし。」との給へども、小山田は涙にくれ、重々の御情、冥加の程も恐しく、申上る詞もなし。いふに甲斐なき此の高家がかせくび、義貞公の御手にかゝり申すこと、いかなる先陣さきがけにも勝つて、身に過ぎたる譽、勘氣の父が聞くならば、

さぞ悦び申すべし。此の上は御芳志に、はや首打つて捨てさせ給へ。」と、申し切つたる兩眼に涙を流すぞ道理なる。「えゝ義理ばつたるをのこや。」と、取つて引つ立て塵打拂ひ、「義貞に助けられしと人に語るな。われも人には語らぬぞ。」と、手負せし馬を引立てて靜に打つて過ぎ給ふ。武將の氣質備つて、古今に語るもことわりなり。

小山田は呆然と、義貞の仁心こゝろにしみて立つたる所に、大森彦七盛長、手の者五十騎ばかり、どつと驅寄せ大音上げ、赤地の錦の直垂、中黑の鎧は敵の大將義貞、遠目にも見ちがへず、射取れや〳〵と矢先を揃へ、よこぎる雨と射かくる矢先、さしつたりと、小太刀をぬいて、はらり〳〵と切落す、されども鎧のすきま〳〵、矢ずくめにすくめられ、今はこれまで、われ義貞の命にかはり、其のひまにやすやす落し、情の恩を報ぜんと、求塚に驅上り、「遠からん者は音にも聞け、近き者は目にも見よ。清和天皇の後胤新田左中將義貞、十ぜん

天子に賴まれ參らせ、屍を戰場の土に埋む。功ある大將の最後のていよつく見おいて手本にせよ。」と、高紐切つてとく所を、大森主從おり重り、きりふせ〳〵おさへて首をぞかいたりける。直垂切つておし包み、「官軍の總大將、新田義貞を伊豫の國の住人大森彥七盛長討取つたり。」と名乘りしは、いかめしうこそ聞えけれ。

此の聲に驚き馳散りたる味方の勢、大將を打たせては一人もいきて詮なしと、八方より引返す。義貞も取つて返し、「やあ〳〵同志討する狼狽武者、誠の義貞これにありと、切つてかゝり給へば、「いや義貞が二人あるものか、新銀古銀同じ通用、これで堪忍仕る。」と、一散に逃げて行く。味方の大勢追驅くるを、大將おさへて、「しばらくしばらくかれは聞ゆる佞人、愚痴愚蒙の狼狽者、かゝる者の敵陣にあるは、味方の利運ぞ。」と、諸卒を示す謀、智謀は居ながら天に入り、波をもくゞる尼が崎、山崎過ぎて名將の譽は雲井の桂川、うち越え

尼が崎　攝津國尼ヶ崎市。
山崎　山城國乙訓郡。
桂川　上流を大井川といふ。京都市の西を流れて淀川に入る。

うち越え渡りこえ、世に立ちこえてならびなき、我が立つ杣や都のふじ、西坂本にぞ入りたまふ。

一五　回想のシェクスピヤ

島村抱月

山の懷、水の畔と、地上の住ひは廣いが、こゝ英國のロンドンから西北へ百哩許、エヴンのさゞ波に夜毎の夢を洗はするスツラッフォードの片隅に、方五間には足るまじき一地を劃して、そこをとこしへに世界の眼目とし、そこに不滅の靈火を點じた造化の寵兒シェクスピヤが家は、まことに人の世の譽かな。大英國はよし亡びても、シェクスピヤは亡びぬ、此の一地域あるが爲に、永劫不壞なる英國も亦幸ではないか。

ロンドンに出でしより後のシェクスピヤ、殊にも著作ありてより後の彼は、千の傳記、百の考證よりも、彼みづからの書こそ最も明白

西坂本　比叡山の西麓、修學院村附近をいふ。

島村抱月　名は瀧太郎、島根縣の人、早稻田大學教授、大正七年歿、年四十八。

シェクスピヤ　英國の劇作家、世界最大の文豪。羊毛商の家に生れ、西曆一五八六年ロンドンに出で俳優となり、次いで專ら劇作に從事した。有名な著作三十五編、皆文學上の至寶として尊重せられてゐる。（西曆一五六四—一六一六）

ハムッレット　世界最大の悲劇（西暦一六〇二年作）
マクベス　（西暦一六〇六年作）
スツラッフォード＝オン＝エヴン　シェクスピヤの墳墓の地。
ホーリー・ツリニチー　聖三位一体の義。

に之を傳へて居る。「ハムレット」・「マクベス」の著作は、「ハムレット」・「マクベス」の著者として、天日の輝くが如く遍く後昆を照してゐる。之に想像を加へんには、既に餘りに煌々たるに過ぐるであらう。唯、我が最も想ふは、スツラッフォード＝エヴンの一青年たるウィリヤム＝シェクスピヤが身の上である。

ヤピスクエシ

かやうな思出に導かれて、我がはじめてスツラッフォード＝オン＝エヴンの土地を踏みしは過ぐる年の春、某月某日であつた。オクスフォードから汽車で二時間が程、巴旦杏の花の暖な赤い家いくつかを過ぎて、停車場近く來れば、かしこに見える一群の樹立が、はやホーリー＝ツリニチーの森といふに、何となく心ときめく。繁みの色はまだ調はぬながらの蒼さ、中央から肅然として立上つたる尖塔は、げにも默して天をさす指の如

く、其の深い意義をば唯感涙あるものが測り得よう。停車場から新開の道を病院の前に出て、町に取りかゝると、もうそこに行當りがある。廣い四つ辻の眞中にしつらへた噴水は今樣ながら、町は何處ともなくさつぱりとして優雅の趣を具へてゐる。店の構へ看板の具合などで、どうも唯の町では無いやうだ。右手は商人御宿、向ふに農作物の店が見える。あの店。シェクスピヤの父の店も盛んな時はあんな風であつたらう。見れば店先に子供が遊んでゐる。ひよつとすると、あの子の顏がシェクスピヤの幼な顏にでも似ては居まいかと、用もないに其の間近まで行きかけると、子供は外國人と見て逃出した。馬鹿らしいとは思つたが、いやしかし、此の邊は、古來交通が薄く、血統が單純であるため、面相がおのづから類似型してゐると聞いた。シェクスピヤの面相にはスツラッフォード型といふものが過たず現はれてゐるといふ。さすれば今の子供

に、かれの幼な顔が寫つてゐまいにも限らぬ。も一度跡をつけて見ようか。など忙しき空想に耽つてゐる間に、時は午近くなつた。地圖によると、此處から向ふの角の小路を拔ければ、すぐ其處がヘンレー=スツリート。シェクスピヤの舊宅の殘つてゐる處である。と思ふに飛立つやうには感ずるが、先づ宿を取つた上と大橋通のゴールドン=ホテルといふを探した。廣い通を眞直に辿ると、いくらもあるかぬ内に、はや橋が見える。其の下はエヴン川であらう。町はこれで盡きるのだから、誠に小さいかはいらしい都會である。ホテルは橋のすぐ手前であつた。

旅行の季節とて、ホテルの客室は凡べて約束濟。よつて是非なく近所の室内裝飾品を賣る家の一室を借りさせ、食事だけはホテルに來てすることとなつた。晝食は獨り後れて調へたから、食堂の模樣などはまだ見ない。兎も角もと、近まのヘンレー=スツリー

グランマー=スクール　文法學校特にラテン・ギリシヤ語の文法を主として教へる學校。

トへ先づ駈けつけた。あれがシェクスピヤの生れた家といふ、其の前には、成程多勢の人が入場を許されるのを待合せてゐる。また此方の軒下には馬車の客待をしてゐるのもある。併しかう見わたすと、さして長くもない通ながら、何となくがらんとして、人の往來も少い。如何にも田舍の小町といふ趣である。

シェクスピヤ誕生の家

折しも空には薄雲が掛つて、冷氣を含んだ風が町を吹渡つて來た。何だか淋しいやうな悲しいやうな風情である。

想像して見ると、シェクスピヤがまだ腕白盛りの頃は、例のグラン

マー・スクールに通ふ朝夕、途すがら張と肩を組んで、此の邊を行きつ戻りつしたものであらう。そして年よりもませた彼は、十六七にもなると、もう一廉の若い衆氣取で、日本ならば湯歸の手拭を肩に、つゝかけ、下駄か何かで、そこらをそゝりあるく方であつたらう。いや彼は案外におとなしい質で、朋輩からは老青年といふやうな綽名でも附けられてゐたかも知れぬ。父が家産の傾くにつれ、生活の辛苦は早くもこの大天才が青年の夢を蝕みそめて、弟と共に商品の買出しから、偶には得意廻りもする。稼業の手傳に追はれて、好きな雜書にも讀耽る暇は無くなつた。夜遲く店を仕舞つてから、僅に自分の寢室で覺束ない蠟燭の光をたよりに、昔の心ゆく唄の本などを讀んでゐると、其の明りが、あの、今見える東北角の窓から微に漏れる。

げに世界の如何なる處にも見がたい偉觀は、此の矮屋の一偶、シェ

スコット
英國の詩人小說家（西暦一七七一—一八三二）

カーライル
英國の學者・歷史家、評論・衣裳哲學」最も著名、晩年同大學の教授となつた（西暦一七九五—一八八一）

ブラウニング
テニスンと並んで、ヴィクトリア王朝の二詩人と稱せられた（西暦一八一二—一八八九）

鑽仰

クスピヤの誕生室であらう。金字に彫られては帝王の書架をもかざる文學史上の大名が、見よ、此の一室に來ては、如何に、賤小に、謙抑に窓壁・天井に其の跡を留めて居るかを。說明係の男が、一葉の薄紙を窓の硝子に當てて指さし示す所を見れば、縱橫に切込みたる名字の中に、鮮にスコットの名も見られる、カーライルの名も見られる。天井にはブラウニングの名が切つてある。そして此等の人々は、此の室の主人の前には、一切の地位・階級を棄脫して、無名微賤の巡禮者として鑽仰の意を主人に捧げてゐるらしい。

其の外は、いはゆる何人も一度は腰かけて見る記念の椅子。案内人がなが〳〵しい說明をしてをる間に、我も同じ道に心を寄するもの、緣なればこそと、人のする通りして見た。續いては、シェクスピヤの指環、シェクスピヤの印形、シェクスピヤの肖像と、眞贋は知らねど、かゝる場所には附物の遺物の數々を巡覽して、再び町に出る。

大通に沿うた、シェクスピヤが專ら羅典の知識を得たといふグランマー＝スクールの前からホーリー＝ツリニチーの寺まで、殆ど此の土地を縱斷しても、三十分とはかゝらぬ。

町の周圍に散在する菅笠を伏せたやうな丘、其の間に擴る牧場畠。立木は楡・柏・山毛欅・水松の類が多からう。總じて綠の廣い緣をつけたやうな、瀟洒たる小都會、その東南を劃つて流れるのが可憐なエヴン川である。春であつたからでもあらうが、打見た所、町の雅趣あるに對して、周圍の色調は青いといふよりも綠である。いかにも若々として、新鮮の氣は野に森に漲つてゐる。華やかな日光が青紗のやうに透ける青葉の蔭には、水の少女、空の少女が踊つてゐる。あのコローの繪にでもありさうな趣。我は曾て始めて鎌倉に勝を探つた時、先づ其の山色の、いかにも歷史と相呼應して蒼古の調を帶びてゐるに魅せられた。其の土地が有してゐる

コロー
佛國自然派の畫家、佛國三風景畫家の一人（西暦一七九六—一八七五）

鎌倉三代
源頼朝・頼義・實朝。

內容と、之を覆ひ包んだ色調との間に、自然の調和があるのを面白く思つた。然るに今スツラッフォード＝オン＝エヴンに來て見るに及んで、そこに一種の意義ある對照を認める。鎌倉三代の歷史は如何にドラマチックであつたにもせよ、畢竟歷史である。其の調は茂古老蒼を加ふるに從つて愈妙を增す。スツラッフォードの內容は、詩である、藝術である、シェクスピヤである。年時を忘れて、常に淸新に常に快活にして、却つて回顧の情を深うするのではないか。

「歷史は老いよ、藝術はとこしへに若くあれ。」

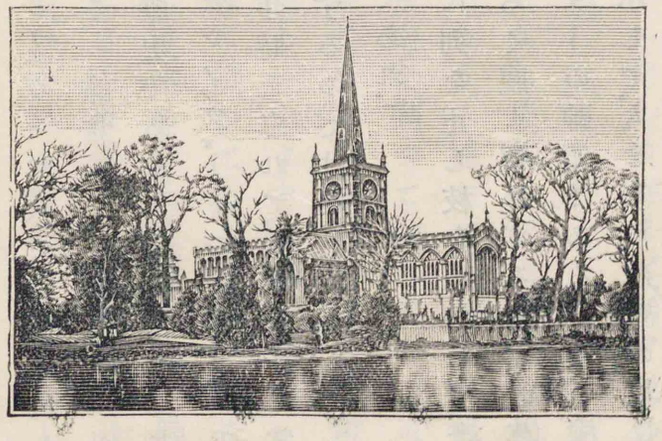
寺の門は、幾百年の菩提樹道の兩側に列を正し枝をわたして、青葉の天蓋を引く。左右に、楡の葉蔭ひろく塵も留めざる一面の墓地は、凡べていはゆるホーリー＝ツリニチーの神領である。その楡の木がくれから、遙に尖塔の頂のみを示して、人をして想望の情に堪へざらしめた聖院は、今や、菩提樹の若葉薫る穹道の奥に扉をあ

シェクスピヤの墓所
スツラツフォード＝オン＝エヴン河畔にある。

らはして來た。

我より先に、遙に離れて行く小さい人影は、黑い外套と空色の絹服と男女二人の後姿、天國の門を叩きにでも行く人かと思はれる。

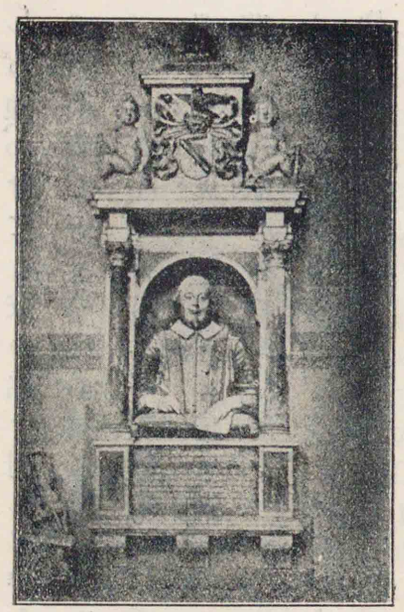
入口には黑き法衣の僧がゐて出入を取締り、入場料も取れば、案内記、繪葉書、記念印紙の類も賣る。これも寺の維持費と思へば、故障はあるまい。さて建立の由來、建築、窓繪の說明はざつと聞いて、つか〳〵と香壇の前に進めば、此處である、欄を隔てて右より二つ目の床石の銘は、



シェクスピヤの墓所

善き友よ、耶蘇の願なり、止めよ、此處に納めたる墓を發くことを。
幸あれ、此の石を庇ふものに、はた呪あれ、我が骨を移すものに。

三百年の間、斯の如き銘を負うて靜に眠つてゐる大詩人の骨は、今後といふとも、彼が著作の亡びざるかぎり、永劫に亘つて動かさるゝことはあるまい。思ふに敢へて此の願をなみせんと企つるものがあつたら、世の憎禍は必ず其の頭上に集り來るであらう。墓の主が遺したる呪詛の祈は、今やかの古の豫言の如く、事實となつて効力を現し來つたと言はずばなるまい。



シェクスピヤの墓前

右手には、之と並んで妻アンが墓、左には三つ相續いて娘スザン

ナ及び其の夫等一族の墓がある。

回顧すれば、我がはじめて學窓にシェクスピヤを習讀して以來殆ど十年、しば〳〵想像の間に出入してゐたスツラッフォード＝オン＝エヴンの地、わけても彼の銘を刻んだ詩人の墓を今、目のあたりに見て、我は眞實我が身の此の境にあるかを疑ふの情に堪へなかつた。

けれども、斯樣にして墓前の欄に手をかけたまゝ、暫し茫然たる胸の底から湧いて來るものは、一種の喜悅光明の情であつた。伽藍の中は取りわけて空氣がひや〳〵としてゐる。光線は色硝子を透して明るさを減ずる。場所は人氣の少い寺院の而も十字架像の前である。それにも拘らず、此の時の我は、千古の詩人が冷かに骨をよこたへてゐる傍に立つて、一種の溫さを感じた。嗚呼茲にこそ、シェクスピヤの靈は安まれと思ふに、おのづから肅然として容を正しうするの氣は生ずれど、されども哀傷の心寂寞・凄愴の情

絶えてきざさぬ。むしろ愛慕の感・怡悅の感光明の感が身邊を圍繞するやうに思はれた。由來英雄の追懷は如何なる莊嚴・美麗の形に於てするも、畢竟生時の燦爛と死後の變易・荒廢との對照に外ならぬ。玉壘浮雲・無主の江山・何れか廢墟を傷み荒廢を哀しむの情でなからう。所詮英雄を弔するの意である。而して斯の如きは、亦實に現人生を弔するの意味ではないか。人生は到底其のしりへに變易を豫想し廢滅を豫想しなければ、深切の感味を發しない。ひとり我は、今詩人シェクスピヤを弔せんと欲して、此の意外のものに逢著した。かれの追懷は繁榮である、光明である。而してかの藝術の追懷もまた茲に歸するであらう。滅び行くは人生の姿、之を暫く天上不滅の光に照して示すものが藝術ではないか。されば いふ「人生は常に荒廢なり、藝術は常に繁榮なり」と。

（抱月全集）

芳宜園
橘千蔭、江戸の人、國學者、歌人、文化五年(一二四六八)歿、年七十五。

うなねつく

このかみ

橘千蔭像
年七十三歳の像、東京帝室博物館藏。

縣居
賀茂眞淵。

うるはしむ

一六　芳宜園大人の靈を祭る

橘千蔭

茲に文化の五年九月八日、平春海謹みて芳宜園の大人の奥津城の御前に菊の花一枝をたむけ、香の木一ひらを焚きて、うなねつきて申さく、あはれ悲しきかも、君は我に十といひて一年のこのかみにおはすなるが、今そのかみを思ひ出づるに、君は正に盛りの齢におはして、吾はまだ童にてぞ侍りける。常に縣居の庭に物學びに行きかひたる時、あしたにまゐるとては君のみはかしのしりへに從ひ、ゆふべに罷るとては君の御袖のもとに縋りて、相うるはしみ

さが

しぞく

橘千蔭筆
元旦
ふるとしのきのしら雪解けそめて、朝日うらゝに春は來にけり　千蔭

まつれること、親子はらからにも何か異ならん。書讀むとては君を師とも尊み、歌作るとては吾をおとゞひの列にぞ教へ給ひける。中頃にして、君は仕への道に暇なくおはし、吾は世のさがにかゝづらひて、おのづから疎き方にも過ぎつるを、君仕へをしぞき給ひて後は、吾も同じ巷に移り住めば、花を尋ぬとては吾道しるべをなし、

橘千蔭筆

月を思ふとては君が舟に相乘り、憂き事も共に憂へ、嬉しき節も共に喜びて、世にありふるわざのまめごとも、あだごとも、かたみにへだてなく、心をかはせること今に二十年、その初を繰返し數ふれば、相友たる事既に五十とせにぞ餘りける。さるを今後れ奉りて、い

つの世にか相見ん、何れの時にかことはん。常なきは人の身の習ぞと知れど、これをいかで歎かざらん、かゝるを誰かはよく堪へん。

あはれ悲しきかも。文の林世々に衰へ、言の葉の道日々に下りゆけるを、賀茂の翁世に出でて、「今をすてて古に復り、青雲の高き心しらひを求め、倭文機の文あるみやびごとを貴みいへれど、くひぜを守り、舟にきだつくる輩かれに泥みこゝにひかれて、尙怪しみとがむる類多く、たまあひてよくうけひく人なん稀なりしを、君獨り心を起して、普く諭し、廣く誘ひしより、近き人は目のあたりあひうづなひ、遠き人ははるかに靡き來て、古ぶりの歌世に盛りになりたるなり。

くひぜを守り　韓非子にある語。
舟にきだつく　呂氏春秋にある語。
たまあふ
うづなふ

その自ら詠みいで給へる歌を見るに、古き調・新しき姿、とりく〳〵に備らざるはなし。その古を寫せるは藤原・寧樂の御世に及び、後

のたくみに倣へるは、堀河・鳥羽の御時に下らず。心に思ふ事は口に盡さざることなく、目に觸るゝものは言葉に載せざることなんあらざりける。これを見て、たかきもみじかきも、めでたふとまざる人なし。又事好みの人はその名を君に知られては、身の面おこしと思ひて世にも誇り、君の一歌を得ては、價なき寶にもかへじといひてぞ深く喜びける。

面おこし
價なき寶

言擧琴後集　十五卷、村田春海の歌文集。
村田春海　江戸の人、國學者、文化八年（一八一一）歿、年六十六。

然るを今、黃金の聲忽ち止みて、玉の響再び聞えずなりぬるは、わがどちの歎のみかは、大方の世の人の憂ともいひつべし。これをいかでか惜しまざらん、かゝるを誰かは慕はざらん。あはれ悲しきかも。わがかく言擧するを泉の下にもさやかに聞召し、天翔りても遙に見そなはせとなん申す。

（琴後集）

古今和歌集
二十卷。延喜五年、醍醐天皇の勅を奉じて紀貫之・凡河内躬恒・壬生忠岑・紀友則、の四人が撰んだ和歌集で、勅撰和歌集の濫觴。

紀貫之
平安朝時代の歌人、天慶九年（一六〇六）歿、年六十五。

素性法師
俗姓良峰玄利、歌人、清和より醍醐帝頃の人。

一七 和歌

一 古今和歌集より

紀貫之

袖ひちてむすびし水のこほれるを
春たつけふの風やとけらむ

素性法師

梅ちるやまがきにまがふ
みやこそはるあらしのかけふく

紀友則
歌人、古今和歌集の撰者、延喜五年（一五六五）歿、年六十一。

僧正遍昭
俗名良峰宗貞、六歌仙の一人、寛平二年（一五五〇）寂、年七十五。

凡河内躬恒
歌人、古今和歌集の撰者、延喜七年（一五六七）歿、年四十九。

紀友則

ゆきとのみ
はなのちるらむ

僧正遍昭

なまねの心
ちとうとき
ちとむく

凡河内躬恒

ゆきかふ
かたをそ
風をなつかし

壬生忠岑
歌人、古今和歌集の撰者、康保二年（一六二五）歿、年九十八。

大江千里
叡議首人の子、歌人、延喜頃の人。

在原業平
阿保親王の第五子、六歌仙の一人、元慶四年（一五四〇）歿、年五十六。

山里は秋こそとりわきてかなしけれ
鹿のなく音に目をさましつつ

壬生忠岑

月みれはちちにものこそかなしけれ
わが身ひとつの秋にはあらねど

大江千里

よしやくもゐる神代もきかぬ竜田川
からくれなゐに水くくるとは

在原業平朝臣

坂上是則
歌人、延長八年（一五九〇）歿。

喜撰法師
歌僧、六歌仙の一人。

あさぼらけ有明の月とみるまでに
吉野の里にふれる白雪

坂上是則

わがいほは都のたつみしかぞすむ
よをうぢ山と人はいふなり

喜撰法師

新古今和歌集
二十卷。元久二年、後鳥羽上皇の院宣により定家・家隆・通具・有家・雅經が撰んだ和歌集。

皇太后大夫俊成
藤原俊忠の子、歌人、元久元年（一八六四）卒、年九十一。

藤原秀能
秀宗の子、歌人、承久三年（一八八一）卒、年五十七。

二　新古今和歌集より

皇太后宮大夫俊成

けふとても春とはいはじ春日野の
都にのみとおもひなすこそ

藤原秀能

月根ちらす雅波はの
あしたの雲をとゝめる白波

藤原家隆
光隆の子、歌人、新古今集の撰者、嘉禎三年（一八九七）卒、年八〇。

太上天皇
第八十二代後鳥羽上皇の事、延應元年（一八九九）崩、御壽六十。

西行法師
歌僧、俗名佐藤憲清、建久元年（一八五〇）寂、年七十三。

ひとつに世をあはれとおもふ秋なれば
月たゝしとゝめて村雨のそら

藤原家隆朝臣

野原よりあはのゆかりの秋萩は
ちるまでこゝに村のをとゝ

太上天皇

ちるまでこゝに村のをとゝ

西行法師

あはれいかばかりかは
鳴沢の秋はあはれ

寂蓮法師
歌僧、俗名藤原定長、建仁二年（一八六二）寂。

藤原定家
俊成の子、歌人、新古今集の撰者、仁治二年（一九〇一）卒、年八十。

摂政大政大臣
藤原良經、兼實の子、歌人、建永元年（一八六六）卒、年三十八。

さびしさは
槙たつ山の
こだちかな
秋の夕暮

寂蓮法師

こんやさは
花も紅葉も
なかりけり
浦の苫屋の
秋の夕暮

藤原定家朝臣

さしの葉は
露もはらはに
うちそよぎ
冷れる月の
影くまなし

摂政大政大臣

鴨長明
山城の人、歌人、建保四年（一八七六）卒、年六十三。

前大僧正慈圓
天台座主、慈鎮と謚す、歌人、嘉祿元年（一八八五）寂、年七十九。

石川や瀬々の
月となれをみて
ぬれぬ人
なしとぞ
思ふ

鴨長明

君をのみ
思ふ心の
ひとすじに
なびけ
ぬ人の
恋しき

前大僧正慈圓

一八　歴史と自然と人　一

大類　伸
東京市の人、明治十七年生、歴史學者、文學博士、東北帝國大學教授。

私は歴史を學んで居る。一人である机に向つて書物のページをめくつたり、又書物を閉ぢ、ペンを置いて、靜に思を何百年何千年の昔に馳せる時、私の頭は歴史で充滿して居る。その時、私には歴史が人生唯一の權威者であるかの如く考へられる。時の大いなる流は古今東西一切のものを呑込み去つて、偉大なる人間の思想も、事業も、總べては時の流を飾る漣に過ぎないとも思はれる。恰も三千年の昔、聰明な希臘の人々がオリンプスの神々の絶大な威力の前に拜跪した如くに、我等も亦歴史の前に絶對的に拜跪せねばならぬのであらうか。

オリンプス
希臘の山、希臘神話に諸神の棲居せる山としてある。

歴史あつて以來人類が進歩のために拂つた代價は、善にあれ、惡にあれ、いづれにしてもそれは莫大なものである。人類文明の進歩のためと云ふ美名の下に、人間は莫大の犧牲を拂はねばならなかつた。それは實に數千年來の事實であつた。かくして歴史は立派な暴君であつた。然り暴君となり得るだけの堂々たる權威者であつた。恰もその睫毛が微動しただけでもオリンプスの靈峰搖いで紫電閃き天地震動すと謠はれた、かの大神ゼウスの如くに。

ゼウス
希臘神話に諸神の主宰者としてある。

併し一たび書齋を出でて野外に歩を運ぶ時、私の頭から歴史の影は漸く薄く消え去つて、自然が私の王國を占領し始めたかのやうに感ぜられる。仰いでかの碧空を眺めた時、草原に休んで萠出る綠の色に見入つた時、その澄切つた快き色彩と、生立つ希望と力とに溢れたその光とを認めずには居られない。その色、その光、それは殘念ながら歴史のどのページにも求められないものである。それは嬰兒の頰に溢れた豐かさと心地よさとが、到底額に皺の波

を寄せた年輩の人に求められない如くに。

歴史は時の流ではあるが、そこには人間の手が働いて居る。人間の努力と業績とを除けば、歴史は極めて寂しいものになる。併し今眼の前に展開された自然には人間の力の跡はない。固よりそこには拓かれた田畑もあり、伐られた林もあらう。しかもそれは自然を飾る綾とはならうが、自然の權威を傷つける迄には至らない。人間は自然に對してそれ程に弱いのである。田舍道に沿うて流れる小川は如何にもさゝやかなものではあるが、能くそれに見入つた時、史上に英名を轟かした偉人の事業も、この小川に較べて全く無意味なやうにさへ思はれる。或は足駄の齒に蹴飛ばされる路端の

プラトー

プラトー
希臘の哲學者（西暦紀元前四二九—三四八）

アリストートル
希臘の哲學者（西暦紀元前三八四—三二二）

ソロモン
イスラエルの王（西暦紀元前九九三—九五三）

小石ですらも、プラトーやアリストートル以上の哲學を語つて居るやうだ。げにソロモンの榮華も野に咲く一莖の白百合の花にさへ及ばない。

想ふに歴史の領分は、書物や書齋の裡に限られるのではあるまいか。人間の集團生活から生れた法律は侵すべからざる神聖を具へて居るとは言ふものの、自然の大なる道の前には風前の燈に等しい心細さを感ぜざるを得ない如く、歴史の暴君も自然の前には跪かねばなるまいと思はれる。歴史は我等に回想を敎へる。そこに幾多の思慮もあり、考察・判斷もある。併し我等に創造の力を與へるものは、實に自然を措いて他にはないので

アリストートル

はなからうか。

歴史に倦きた時、歴史に滿足を得られぬ時、杖を曳いて一歩野外に出れば、新しい生命と力とが其處に漲つて居るやうに思はれる。否、必ずしも野外に散策せずとも、書齋の窓を開いて蒼々たる大空を仰ぐだけでも宜しい。その時、目に見えない大きな手に摑まれて、大地を引摺られて行くやうな思から、忽ち自由の天地を自在に飛廻る境涯に放たれたやうに感ぜられる。一たび蒼茫として限ない大空を仰げば「玉堂金馬何處にか在る。雲山石室高うして嵯峨たり。」の感が起るのは古人のみには限らず、我等とても同樣である。古來偉大なる宗教家が屢〻俗界を離れて自己の修養に努めたのも、一は彼等が新しい生命と力とを自然の懷に求めた結果であらう。野に叫ぶ人の聲が偉大な響を我等の耳に傳へるのも、或は自然の力がその人を通じて我等に傳はつて來る爲ではなから

ダンテ
伊太利の詩聖
（西暦一二六五—一三二一）

うか。

自然の姿に偉大な生命を感得することは、卽ち人間がそこに神を認めたことではあるまいか。或は神と云ふ代りに大なる道と言つても宜しい。神の世界は純一なる世界である、絶對の國である。そこには永遠のみあつて、生死もなければ流轉もない。無論、複雜の諸相もなければ、隨つて歴史もない。ダンテの神曲には天上界を以て清淨の光明界として居る。しかも如何なる形もそこには玲瓏・透徹、水晶の如くにして何等の陰影をも止めない。之に反して、人間の世には光があれば必ず闇が伴なふ、形があれば又必ず影がなければならぬ。

絶對の境涯でない人間界には、寧ろ影あることに依つて、闇あることに依つて、光の輝を一層明るくするやうに思はれる。そこには總てが反照に依つて、對比に依つて現されて來る。生と死、善と惡、大と小、長と短などいづれもそれで、その生命は言ふまでもなく複雜の相でなければならぬ。されば こそ歴史がそこに生れて來る。即ち華々しさはあるけれども眩しい世である。絶對・純一の永遠の神の國に對して、常に相對・矛盾を免れない。眩しい焦燥の氣分に滿ちた、しかも無常・生滅の鄕土である。

固より我等は人間と生れて、自ら人間たることを誇として居る。けれども自然の姿に接しては、その裏に純一な生命を認め得たやうに感ぜられる。さうしてそれに依つて無限の悅を贏ち得たやうに感ずる。その時こそ、我等は神の力に觸れたのではあるまいか、大道を悟り得たのではあるまいか。少くともその瞬間、我等は

歴史を忘れて了ふ、生滅の念は消え去つて了ふ。時の變遷も、發展の限なき連續も、極めて小さなものとなるのである。古代の人はかゝる絶對・純一の感を信仰の對象に於て求めることが出來た。されば こそ其の拜跪した神々の諸像は、現代人には到底企及することの出來ない程の崇高さと單純の偉大さとを發揮したものであつた。

一九　歴史と自然と人　二　大類伸

東洋文明の理想は、超人間的の力に跪くことにあるやうに思はれる。帝王政治の意義もそこから生れて來ると思ふ。併し一たび轉じて、西洋文明を顧みれば、そこには人間が總てを征服せずんば止まない傾向が著しく目立つ。或人は「文化とは人間が自然を征服することだ。」と言つたが、果してさうとすれば、西洋文明こそ

は眞の文明であるやうにも考へられる。今こゝに私は東西文明の優劣を論ずるのではない。併し自然と人間とを對立させて考へる時、兩者の關係が東西の文明に於て餘程その位置に差違あることを、大體に於て認めなければならない。少くとも西洋文明三千年の發展史を顧みれば、そこに人間の力が著しく高調されて居るのに氣付くのである。

併しながら、ともかく、西洋文明の力に觸れた後、我等は自ら人間であることに非常に興味を持ち、それを誇と感ずるやうになつて來る。固よりこの感じは、必ずしも西洋文明のみのたまものとは限らない。深く自巳を省察すれば、等しく得らるべき感じではあるけれども、西洋文明が特にその點に強い力、或は寧ろ鮮明な色彩を有して居るため、それから受ける感じが頗る強いのである。かかる魅力ある文明が近代の日本の物質上・精神上に少からぬ感動

と動搖とを與へたことは言ふまでもなからう。茲に至つて我等は大自然の前にのみ拜跪しては居られない。

嗚呼、人間の偉大さ。赤兒が全身の力を籠めて泣く聲にも、小學校の子供が運動會の競走に一心不亂に駈ける姿にも、小さい努力ながらも、其處には人間としての力が十分に發揮されて居るのである。藝術家の創作、學者の研究、乃至實業家の經營、政事家の經綸にも、等しく人間の價値を高調せざるを得ない。

こゝまで考へた後に、野外の散策から轉じて人間の波が渦卷く都會の裏に這入ると、周圍の光景は私に又新しい感を起させて來る。靜な小川の囁きよりも、路傍の草の色や小石の形よりも、工場の薄暗い塵埃だらけの部室の内で裸體になつて活動する勞働者の姿に、一層深い意義が認められるやうだ。所謂美しい自然よりも、醜い彼等の姿の方が一層複雜な美を現してゐるのではあるま

ミレー
佛國の畫家（西暦一八一四—一八七五）

天馬空を馳す

いか。ミレーのあの靜な黄昏の祈禱の繪を見ても、一面の畑と遠方の森とに充渡つた大自然の靜けさよりも、其の間に立つた農民の姿に深い意義を認めずには居られない。從來小さいと思つた物も、醜いと思つたものも、茲に漸く偉大なものとなり、美しいものとなつて來る。そこで我等は人間と生れた以上は、自ら人間たることを誇として、此の一生を立派な人間として暮すのが最も有意義であるのだ。我等は斯くして肩身廣く世界に闊歩することが出來よう。茲に至つて、歴史の權威も自然の威力も全く忘れられて了ふ。過去に煩はされず、周圍に束縛されず、正に天馬空を馳すの意氣込で、思ふが儘に進んで行き得るやうに思はれる。此の時、誰人か人間の力に感謝しないものがあらう。

併し人間に隨喜しつゝ有頂天になつて進み行かうとすれば、私を引止める或物があるやうに思はれる。それは決して惡魔の囁

ではない、恐らく神の聲であらう。それは人間に何物かを命令し指示するものである。

思ふに、西洋の文明は生きることの價値を人間に教へた。さうして其の價値を無に歸せしめない爲に、不斷の奮闘と努力とを人間に慫慂した。東洋の文明は我等の生の窮極を具體的に示した。人間の努力に對して越え難い限界を劃した。生きるが爲には、此の制限を破らざる範圍に於て活動せねばならぬ。斯くの如くにして、我等は東西兩文明から兩樣の教訓を受けた。但し其の一が全然正しくして、他が全然誤であるのではない。恐らく人生の姿が異なつた二方面に於て觀察されたに過ぎないと思ふ。自力の誇と不斷の努力とは必要であるが、又同時に人間を一貫する大きな運命の力も無視する事は出來まい。そこに人間の努力に一の限界が置かれる事となる。さうして又自然が人間に對して大い

なる威力を揮ふ事が可能となる。是に於てか、一たび自然を棄て、人間にのみ沒頭しようとした私も、再び仰いで蒼々たる大空に見入らねばならず、更に再び森のたゝずまひにも、一輪の花にも、路傍の小石にも、至大の意義を感じて來るのである。

人間の力の絶對でないことを考へると、自然の威力に注意を拂ふやうになるが、それと同時に、時に對する人間の關係も亦認められて來る。人間の必死の努力に依つても解決されなかつた問題が、時の經過につれて自然に解決される場合は少くない。固より其の場合にも人間の力が働いて居ないのではない。嚮に人間の努力があつたればこそ、それが或年月を經た後に解決されたので、たゞ時の經過のみが解決したのではない。併し如何に人間の努力が大なればとて、時の要素がその間に加はつて來なければ、解決は求められなかつたのである。是に於てか人生に對して歴史は

重大となつて來る。

人事の發展・推移の上に環境の力を重視するものは、卽ち歴史を重んずるものである。人事の説明をその當事者たる箇人に求むるよりも、其者をして此の如き事件を生ましむるに至つた環境に求むるの風は、史的研究の一特色である。さうして其の環境は同時代の自然・社會などに擬せられるばかりでなく、過去の長い歴史の上にも求められる。此の場合、歴史の長い發展の連續は抗ひ難い強い運命の掟のやうに過・現・未の三世を一貫して居る。人間はたゞ其の鐵則に縛られた傀儡に過ぎないかの觀がある。

勿論歴史は人間の生んだ生活現象の連續に過ぎないけれども、其等を時の經過に關聯させて考へて見ると、そこに人間の手で左右することの出來ない強い發展の連續があるやうだ。さうして時の流の中に於てのみ、人間の努力は有形無形の或物として示さ

れるのである。先般の世界大戰が五年の歲月を經て彼の如き結果に終つたのも、窮極は時が戰局を解決したのではなからうか。固より開戰の當初から、戰局の推移に對しては双方ともに異常な努力を費した。併し彼の如き結果に終るべき事は誰人が豫想し得たであらう。要するに人事の終局は、時のみ之を知つて居るのではなからうか。時の力を認める者は歷史の權威を認める者である。私は人間と共に自然を而して自然と共に歷史を、人間生活の要素として認めたいのである。

二〇 知と愛

西田幾多郎

西田幾多郎
石川縣の人、明治三年生、哲學者、文學博士、京都帝國大學教授。

知と愛とは普通には全然相異なつた精神作用であると考へられて居る。併し余は此の二つの精神作用は、決して別種のものではなく、本來同一の精神作用であると考へる。然らば如何なる精

神作用であるか。一言にていへば主客合一の作用である。我が物に一致する作用である。何故に知は主客合一であるか。我々が物の眞相を知るといふのは、自己の妄想・臆斷、卽ち所謂主觀的のものを消磨し盡くして、物の眞相に一致した時、卽ち純客觀に一致した時、始めて之を能くするのである。例へば明月の薄黑い處のあるのは、兎が餅を搗いて居るのであるとか、地震は地下の大鯰が動くのであるとかいふのは主觀的妄想である。然るに、我々は天文・地質の學に於て全然かゝる主觀的妄想を捨て、純客觀的なる自然法則に從うて考究し、爰に始めて此等の現象の眞相に到達することが出來るのである。我々は客觀的になればなるだけ、益々能く物の眞相を知ることが出來る。數千年來の學問進歩の歷史は、我我人間が主觀を棄てて客觀に從ひきたつた道筋を示したものである。次に何故に愛は主客合一であるか。我々が物を愛すると

いふのは、自己を捨てて他に一致するの謂である。自他合一、其の間一點の隙間なくして、始めて眞の愛情が起るのである。我々が花を愛するのは、自分が花と一致するのである。月を愛するのは月と一致するのである。親が子となり、子が親となり、此處に始めて親子の愛情が起るのである。親が子となるが故に、子の一利・一害は己の利害のやうに感ぜられ、子が親となるが故に、親の一喜・一憂は己の一喜・一憂の如くに感ぜられるのである。我々が自己の私を棄てて、純客觀的卽ち無私となればなる程、愛は大きくなり深くなる。親子、夫妻の愛より朋友の愛に進み、朋友の愛より人類の愛に進む。佛陀の愛は禽獸草木にまでも及んだのである。

此の如く、知と愛とは同一の精神作用である。物を知るには之を愛せねばならず、物を愛するには之を知らねばならぬ。數學者は自己を棄てて數理を愛し、數理その者と一致するが故に、能く數

理を明にすることが出來るのである。美術家は能く自然を愛し、自然に一致し、自己を自然の中に沒することによつて、始めて自然の眞を看破し得るのである。又、我は我が友を知るが故に、之を愛するのである。境遇を同じうし相理解する事が愈深ければ深い程、同情は益濃になる譯である。併し、愛は知の結果、知は愛の結果といふやうに、此の兩作用を分けて考へては、未だ知と愛との眞相を得たものではない。知は愛、愛は知である。例へば我々が自己の好む所に熱中する時は、殆ど無意識である。自己を忘れて、唯自己以上の不可思議力が獨り堂々として働いて居る。此の時が主もなく、客もなく、眞の主客合一である。此の時が知卽愛、愛卽知である。數理の妙に心を奪はれ、寢食を忘れて之に耽る時、我は數理を知ると共に之を愛しつゝあるのである。又我々が他人の喜憂に對して、全く自他の區別がなく、他人の感ずる所を直に自己に感

じ、共に笑ひ共に泣く、此の時我は他人を愛し、又之を知りつゝある のである。愛は他人の感情を直覺するのである。池に陷らんとする幼兒を救ふに當つては、かはいゝといふ考すら起る餘裕もない。

普通には、愛は感情であつて、純粹なる知識と區別されねばならぬといふ。併し、事實上の精神現象には、純知識といふものもなければ、純感情といふものもない。此の如き區別は心理學者が學問上の便宜のために作つた抽象的概念に過ぎない。學理の研究が一種の感情によつて維持されねばならぬやうに、他を愛するには一種の直覺が基とならねばならぬ。余の考を以てすると、普通の知とは非人格的對象の知識である。之に反して、愛とは人格的對象の知識である。たとひ對象が非人格的であつても、之を人格的として見た時の知識である。兩者の差は精神作用その者にあるのではなく、寧ろ對象の種類によるといつてよろしい。而して古來幾多の學者哲人の云つたやうに、宇宙實在の本體は人格的のものであるとすると、愛は實在の本體を捕捉する力である。物に對する最も深き知識である。分析推論の知識は物に對する表面的知識であつて、實在その者を捕捉することは出來ぬ。我々は唯愛によつてのみ之に達することが出來る。愛は知の極點である。

以上、少しく知と愛との關係を述べた。今之を宗教上の事に當てはめて考へて見よう。主觀は自力である。客觀は他力である。我々が物を知り、物を愛するといふのは、自力を棄てて他力の信心に入る謂である。人間一生の仕事が知と愛との外に無いものとすれば、我々は日々に他力信心の上に働いて居るのである。學問も道德も皆佛陀の光明であり、宗教といふものは此の作用の極致である。學問や道德は、個々の差別的現象の上に、此の他力の光明

に浴するのであるが、宗教は宇宙全體の上に於て絶對無限の佛陀その者に接するのである。「父よ若し聖旨にかなはば、この杯を我より離し給へ。されど我が意のまゝをなすにあらず、唯聖旨のまにまになし給へ。」とか、「念佛はまことに淨土に生るゝ種にてやはべるらん。また地獄におつべき業にてやはべるらん。總じてもて存知せざるなり。」とかいふ語が宗教の極意である。而して、この絶對無限の佛若しくは神を知るのは、唯之を愛するによりて能くするのである。之を愛するが卽ち之を知るのである。印度のヴェーダ教や、佛教の聖道門は之を知るといひ、基督教や、淨土宗は之を愛すといひ、又は之に依るといふ。

各自其の特色はないではないが、其の本質に於て同一である。神は分析や推論によつて知り得べき者ではない。實在の本質が人格的のものであるとすれば、神は最大人格的のものである。我

父よ云々　新約全書馬太傳の語。

念佛は云々　歎異鈔第二章の語。

ヴェーダ教　婆羅門教をいふ。

我が神を知るのは、唯愛又は信の直覺によつて知り得るのである。故に我は神を知らず、我唯神を愛す又は信ずといふ者は、最も能く神を知つて居る者である。

（善の研究）

二　希臘思潮一

金子筑水

希臘人が如何に自然の生活を尊重し享樂したかは、彼のオリンピヤの祭禮をはじめとして、人類生活の善美を祝福する祭典をば、彼等の最も重要なる年中行事の一とした事實でも明白である。無數の祭典そのものが、人類生活の幸福を祈つたものであるばかりでなく、祭典に伴なつた各種の儀式や會合や競技や遊戯やは、盡く人類自然生活を肯定し、祝福するものに外ならなかつた。殊に、希臘人が、如何に自然を尊んだかは、精神方面の發達と併せて、最も深く肉體そのものの美を尊重したことによつても明白である。

金子筑水　名は馬治、長野縣の人、明治三年生、文學博士、早稲田大學教授。

オリンピヤ　古代希臘の聖域で、其の祭典は全希臘の國々の大祭であつた。

ソクラテス　世界四聖の一人、希臘の哲學者（西暦紀元前四七〇—三九九）

プラトン　希臘の哲學者（西暦紀元前四二九—三四八）

ペリクレス　西暦紀元前四二九年歿。

勿論、ソクラテスは節制主義の元祖であり、ソクラテス學派には有名な禁欲主義者が續出し、またプラトンのごときも明に一種の悲觀的傾向を示したことは拒まれない。されど、此等は希臘全盛期に起つた現象ではなく、孰れかといへば、全盛斯以後寧ろ希臘末期に屬した現象と見られる。西紀前約第五世紀における著名の政治家ペリクレスの時代、普通に謂はゆる希臘の全盛時代までの傾向に就いて言へば、希臘人の生活は、どこまでも雄々しく華々しい樂天的生活であつた。節制主義は、單に過度な耽溺を戒める教訓であつて、決して、現實生活否定の意味を持たなかつた。希臘人が如何に自然生活を尊重したかは、彼等の人生觀

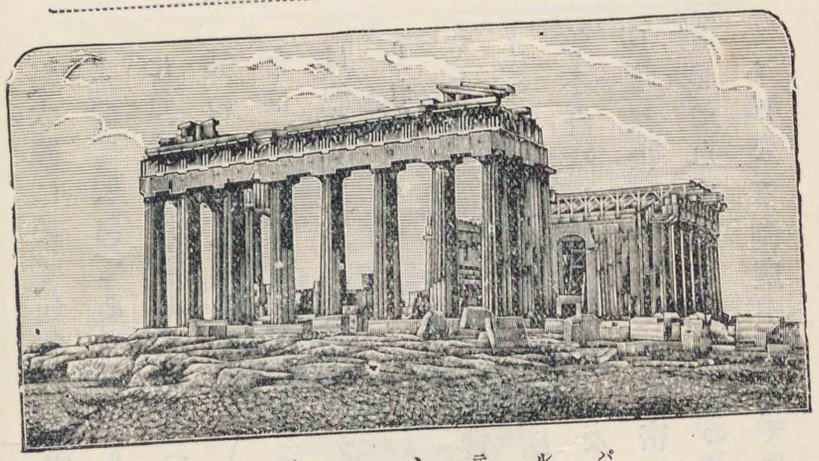
希臘古典初期の土器繪

が、大體に於て、如何に現實的であり、又如何に樂天的であつたかによつて明白である。オリンピヤの神殿は、文明史的に觀察して、確に希臘文化の結晶であつた。神々が直接現世を支配して、人世全體の上には、善はいよ〳〵榮え、惡はいよ〳〵衰へるといふ正義が行はれて居るといふのが、希臘人の深い確信であつた。即ち、現世は、飽くまで神々に支配されてゐる、美しく貴い正義の王國と考へられた。

希臘思想が、自然的・現實的であつた事と聯關して、特に、茲に注意さるべきは彼等の生活、隨つて思想全體が極めて自由であつて、何等不自然な束縛を受けなかつたことである。古代文明國、例へば、印度又は埃及等には、嚴密な階級制度が存して、生活も思想も、全然制限され束縛されたものであつた。これに反して、希臘には、最初からかゝる制度が無く、又希臘人の生活は、他から束縛を受けるに

パルチノン神殿

アテナ・パルテノスを祭る爲に建てられた希臘ドリック式の殿堂で、アゼンスのアクロポリスにある。世界古代遺蹟の最も壯麗なものである。

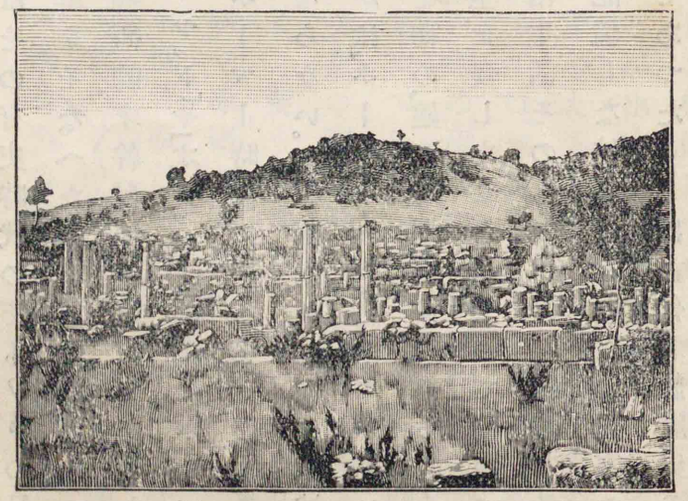


パルテノン神殿

は餘りに强烈であつた。而して、自主的であり、獨立的であることは、最初から彼等の根本傾向であつたと言はれる。希臘人本來の面目として、彼等は、思想上、何等不自然な束縛が無く、飽くまで自由獨立の精神に富んで居たのである。すべて、自由が有る所には進歩があり、創造が有る。否、進歩や創造やは獨り自由が存する處にのみ存する。歴史上、新制度や新思想を産出した民族は必ずしも少くないが、希臘人ほどかぎりない創見と創意とに富んだ民族は他に類例を求め難い。希臘

文明史は、眞に、新生活・新制度・新思想創造の歴史であつたとも見られる。極言すれば、近代生活に於て見出されるあらゆる制度・文物・思想・感情は、盡くこれを希臘文明史の中に發見することが出來る。快活な自由な不羈獨立の傾向は、どこまでも希臘人の特徴であつた。

しかしながら、希臘思想の根本的特徴は、その藝術的である事に存するいふのが、殆どすべての批評家によつて異口同音に主張された解釋である。げに、希臘民族



オリンピヤの舊址

が、最も卓越した意味に於て藝術的であつたことは、到底否定されない事實である。 畢竟、希臘民族はその有史時代のそも〳〵の最初から、すでに卓越した藝術的才幹をそなへた稀有な民族であつて、その燦爛たる歴史は、主として藝術的才幹發展の歴史であつたとも觀察される。 ホーマーの「イリヤッド」や「オデッセー」は、單にホーマーといふ詩人の作ではなく、實にホーマー時代に至るまでの全希臘民族の藝術的發展の結果に外ならない。 希臘人が、如何に卓越した意味に於て藝術的であつたかは、ホーマー・ヘシオッド・エスキロス・ソフォクレス等の大詩人の輩出を初め、建築・彫刻・繪畫等あらゆる方面に亙つて、藝術上の世界的典型を殘したことによつて明白であるが、しかも、古代希臘民族の日常生活そのものが、最も顯著な意味に於て藝術的であつたことを記憶しなければならぬ。 彼等の生活そのものが、徹頭徹尾藝術的であつたことは、古代希臘歴史の

ホーマー　西暦紀元前九〇〇年頃の希臘の詩人。イリヤッド・オデッセー何れもホーマー作の叙事詩。

ヘシオッド　西暦紀元前九〇〇年頃の詩人。

エスキロス　希臘の悲劇作家（西暦紀元前五二五—四五六）

ソフォクレス　希臘の悲劇作家（西暦紀元前四九五—四〇六）

華と見られるオリンピヤの祭禮などを想像しても、極めておぼろげであるが、その一斑を推知することが出來る。 例へば、オリンピヤの神殿を想像すると、橄欖の樹の繁つた青々とした小高い森の彼方に、神々しいツォイスの神の彫像、さては、無數のオリンピヤの神神の尊い姿が見られる。 神殿へ進む道の兩側には、綠の竝樹の間に、さま〳〵の純白の美しい彫刻が立つてゐる。 そして、希臘全國の津々浦々から集つた無數の老若男女の群は、夥しい人波を打つて、オリンピヤの神殿へと進んで行く。 髪うち垂れて、白い長いガウンを著た若いをとめの群は、月桂樹や橄欖の樹の枝を手に〳〵高く捧げ、美しい花輪に飾られた車を挽きながら、神々を讃美し、生活の美を祝福する歌を歌ひつゞけて、前へ〳〵と進んで行く。 海濱の大遊戯場には、美しい健な身體を誇るあらゆる種類の競技や遊戯やが行はれて、勝を爭ふ喊聲はげに賑々しく聞える。 森の此

ツォイス　古代希臘の宗教に於ける最高の神。

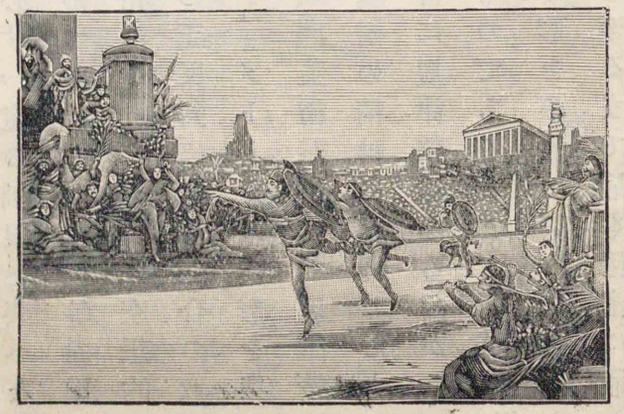
方の靜な場所には、全國から集つた無數の抒情詩人や、劇詩人の詩歌くらべが行はれて、審判官や民衆やは、熱心に朗讀される作品に耳を傾けてゐる。ゲ：ムに勝つた勝利者を祝福する凱歌の聲や、各所の廣間に張られた大宴會場から聞ゆる歡聲は、徹宵賑はしくどよめき渡つて、いつまでも歡樂の盡きるを知らざるものの如くである。

オリンピヤ勝利の神

希臘人の生活そのものが、藝術的であつたことは、かやうなオリンピヤの祭禮に於ても明白であるが、しかも、此等の藝術的傾向は、そも〳〵如何なる精神的特徴から發生したか。これを闡明することは、決して容易な業

闡明

ではないが、一言にして蔽へば、そは最も精緻微妙を極めた象徴的傾向であつたと言へよう。象徴的傾向とは、こゝでは最も廣い意味に用ひて、すべて不定なものに一定の形象を與へる精神作用を意味する。總じて、鮮明な形を造り出す所謂造形的才能が、こゝでいふ象徴的傾向に外ならない。すべての物に形を與へ、すべての物を具體化して、あり〳〵と鮮明に靈活に眼前に眺めることは、一切の藝術的活動の根本で、かやうな才幹を備へた者のみが、藝術的であり、藝術家たることが出來る希臘人が、すべて不定なもの茫漠たるもの無制限な



オリンピヤ競技の光景

ものを嫌つたことは、顯著な事實で、漠然たるものには、必ずはつきりした定形を附し、無制限なものには、必ず一定の制限を與へなければ已まなかつたのが、彼等の特徴であつた。しかも、彼等希臘人は、例へばエジプト若しくは印度の國俗のやうに、極めて空想的な荒唐奇怪な形を事物に與へず、寧ろ、その正反對に、最も釣合の取れたシムメトリカルな、規矩整然としたジェオメトリカルな形を與へたことも、著名な事實である。後代の歐洲美術が、すべて、規律整然たる形を取るに至つたのは、夙に希臘藝術の精神に立脚したものであると言はれなければならぬ。否、啻に規律整然たるばかりでなく、象徴的傾向は最も精微を極めたものであることも記憶されなければならぬ。即ち、たゞおほまかな形を事物に與へたのでなく、例へば彫像の衣服の襞の一點・一畫に至るまで、最も精密に、最も綿密に一線・一點を苟もしないといふ精緻さが、その特徴であつた。

なほ、また、エスキロスやソフォクレス等の劇詩を見れば、後代の詩人をも瞠若たらしめるやうな、最も綿密な記述や描寫や觀察やが、全篇に溢れてゐる。後代歐洲の藝術が、極めて精緻な情味を備へるに至つたのは、これ、また、希臘傳來の物であると言はなければならぬ。

三　希臘思潮　二

金子筑水

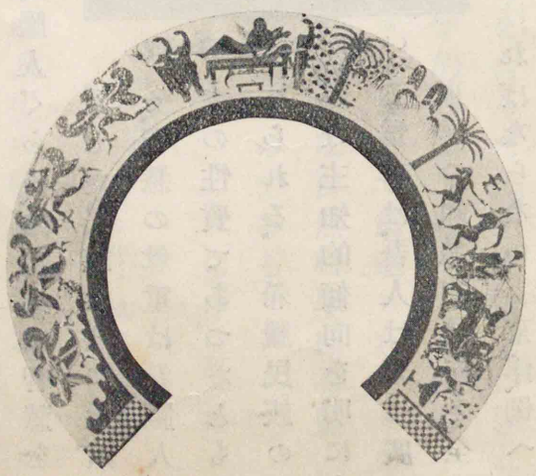
希臘文化の內容は、極めて複雜であつた。しかも、希臘は有史以來第一位を以て稱せられる文化國であつた。而して、此等複雜な文化の根本內容を成してゐるものは、實に希臘人の藝術的天才であつたと言はれる。吾人は、茲に彫刻・建築・繪畫・文學等に現れた希臘思想の具體的內容を、一々綿密に觀察する餘裕を持たない。されば、今日、吾人が希臘人の思想・感情に就いて知り得る所以のもの

は、主として、此等藝術品を學ぶ事に因つてである。今日まで殘された希臘藝術は、最も具體的に希臘人の思想・感情を傳へて居る。まづ、希臘文化の淵源とも見らるべき神話は、卽ち最古の希臘人の藝術的才幹の發現であつたと觀られる。古代希臘人に於ては、他の古代民族の場合と同じく、自然界の一切事物は、盡く美しい生命を備へた靈妙な活物であり活體であつた。山川草木は、盡く美妙なはたらきを備へた靈體であつた。美しい神々は、すべて、かゝる靈妙な活物又は活體に外ならなかつた。宇宙の萬象が、徹頭徹尾、かくの如く善美な神々に支配されて居ると觀た所に、希臘人の熱

希臘の古代彫刻

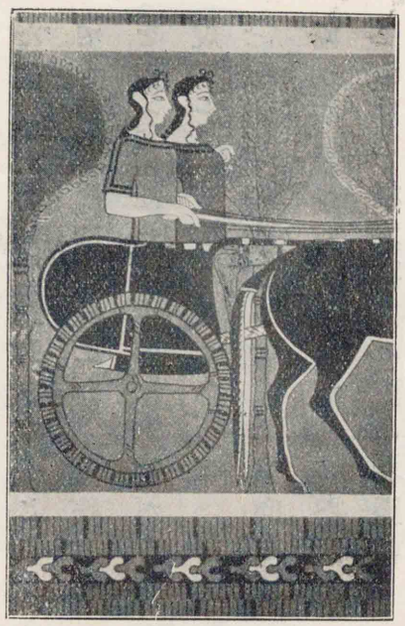
烈な樂天的兼宗教的傾向が存した。宇宙を混沌たる無秩序・無規律な體と觀ず、飽くまで秩序整然たる貴く美しい現實體と觀たところに、古代希臘人の確信が存した。彼等の藝術的天才は、どこまでも無秩序なものに一定の秩序を與へ、混沌たるものに整然たる規律を授けることであつた。

希臘人は特殊の象徴的傾向を備へて、著しく藝術的であつたが、この同一根本特徴は、更に希臘精神の別種な特質と極めて密接な關係を持つてゐる。別種な傾向とは外でもない。希臘精神が、同じく最も顯著な意味に於て、知識的であり、理論的であり、科學的で



希臘中古の土器繪（フェニウス盃）

あつたといふことである。藝術的であつたことと並んで、希臘文明が又著しく主知的であつたことは、希臘を研究する者に取つては、最も明白な事實である。古來、希臘人ぐらゐ、知識又は智慧を尊重した民族は他に比類なく、智慧の尊重は希臘人本來の性質であつたとも考へられる。希臘民族の特殊な主知的傾向を明にする爲には、吾人は先づ廣く東洋の知識的傾向と全く趣を異にした知的傾向に注意しなければならない。東洋、例へば支那・印度に於ても、勿論知識は古より尊重されたのであるが、しかも、支那・印度に於ける所謂知識は、西洋風な精確な組織的な科學的



古代希臘の壁畫（車に乘る人）

知識ではなく、主として、直覺的な印象的な詩的な知識であつた事は明白である。東洋流のこの直覺的知識に比較すれば、希臘人が尊重した知識は勿論、直覺的なものを含んだに相違ないが、孰れかといへば、精緻な確實な系統的な科學的知識であつて、後代ヨーロッパの科學的知識は、實に、希臘人の天才によりて創造されたものと言はなければならない。精確にして緻密な自然科學は、希臘人の天才によつて、始めて確實に基礎を据ゑたのである。

（歐洲思想大觀）

二三　文學と人生

藤井健治郎

諸君、文學とは何であるか。文學は人生の縮圖である。人生と云ふ海の樣に廣いものの上に現れた百般の姿を、鏡の如き狹いものの上へさながらに描寫したものが文學である。さら

藤井健治郎
山形縣の人、明治四年生、倫理學者、文學博士・京都帝國大學教授。

ば人生とは何であるか。　よく世間では「禍福は糾へる繩。」などと言ふが、人の運命は啻に糾へる繩の如きのみではない。彼の大空に横たはれる雲のやうに、あるかと見れば消え、消えたかと見れば涌き、海かと見れば山、龍かと見れば虎、乍ちにして淡く乍ちにして濃く、變幻出沒殆ど端倪すべからざるものである。　たゞ此の一片の雲でさへ少からず吾等の感興を惹くものを、それよりも更に奇妙で、更に變化ある此の人生の波瀾動搖がどうして吾等の感興を惹き起さずにおかう。　變幻出沒極りないのが人生の姿である。これが人生であるかと見れば忽ち其の姿をかへ、それが眞相かと見れば又忽ち消えて跡を晦ます。　凡手は容易にこれを捉へることが出來ず、凡眼はなか〳〵其の眞相を認めることが出來ない。しかも捉へることがむづかしければむづかしいほど、認めにくければ認めにくいほど、之を捉へたい、認めたいといふのは誰しもの

端倪すべからず

人情である。　然るに詩人といふものは、其の鋭敏な眼と靈妙な腕とを以て、その認め難い人生の眞相をしつかりと捉へて來て、それを世人の前に示すのである。　是が文學である。　そこで世人は堪らない。　自分の熱望の目的物が眼前に現れるから、人の視線は之に吸ひつけられ、觀ても觀飽く事を知らないのである。

私は文學は人生の縮圖であると云ふ。　その大體の意味は前に言つた通であるが、猶茲に一つの疑が殘つて居る。　それは外でもない。　その縮圖とはどういふ意味であるかといふことである。雅邦の描いた瀟湘の八景は彼の洞庭湖邊の大觀の縮圖である。又長沙あたりで賣つて居る寫眞もやはり同じ縮圖である。　寧ろ寫眞の方は實際の通り一木一石、少しも實際のものと違はず寫されて居るが、雅邦の描いたものはさうでない。　精密に見れば、實際に生えて居ない木が生えて居たり、實際にある巖が省かれて居た

雅邦

橋本雅邦、東京の人、畫家、東京美術學校教授、明治四十一年歿、年七十四。

瀟湘八景

平沙落雁・遠浦歸帆・山市晴嵐・江天暮雪・洞庭秋月・瀟湘夜雨・煙寺晩鐘・漁村夕照。

一刀兩斷

りするであらう。併しながら兩者共に彼の大觀の縮圖たるに於ては同一である。文學は人生の縮圖であると云ふ。縮圖は彼の繪畫的縮圖の意か。寫眞的縮圖の意か。是が殘つて居る問題である。

此の問題は一刀兩斷に答へる事が出來る。凡そ文學とあらん程のものは必ず繪畫的の縮圖であり、又あるべきものたることは疑ないと思ふ。成程唯縮圖といふ點より見たならば、寫眞の方が遙に精密な縮圖であらう。併し今少し他の點から考へれば、さうではないのである。凡そ物には要といふべき點がある。其の要を捉へさへすれば、其の他は之をあぐる必要もなく、否、むしろ擧げない方がよいのである。實際の物には穢い所もあり、醜い處もある、また不完全な處もある。必要の點以上に此等のものをも殘らず擧げるときには、却て吾等の感興を害ひ、吾等の想像を破つて、彼

絮說

名聞の奴

の湖邊の美を發揮しようとした折角の努力も失敗に終るのである。されば唯湖邊の美觀の肝要な場所をば極めて精采あるやうに描いて、其の他はすべて觀者の想像に任せる方が、その美觀を眞に發揮する所以である。故に美を發揮する方からいへば、繪畫的縮圖こそ眞成の縮圖である。そこで此の人生百般の姿を捉へて、吾等が美的感興の對象となし、美的趣味を滿足せしめようと云ふ文學は、必ず繪畫的縮圖たり又、たるべき事は、殆ど絮說するの必要もないと信ずる。

諸君、文學とは何であるか。文學は人生の救である。

凡そ吾等に苦しみ惱みのあるのは「我」といふものがあるからである。「我」あるが故に空しき望を起し、限なき欲を逞しうせんとするのである。「我」あるが故に限なき名聞の奴となり、限なき黃金の僕となるのである。「我」あればこそ憎惡もあり、怨恨もあるのであ

大悟徹底

易行道

る。名聞の奴となり、黄金の僕となり、憎悪・怨恨の焔に燃さるればこそ、此の世に苦しみといふものはあるのである。さればこそ菩提樹下に大悟徹底せられた大聖も、「我」を以て一切苦の根本となされたのである。若し吾等にして我執を離れ、妄見を脱するを得たならば、吾等の意は如何に安らかに、吾等の情は如何に爽であらう。而して吾等をして此の我執を離れ、妄見を脱せしむる所の易行道は何であるか。そは文學に外ならぬのである。吾等が美はしい詩や歌を吟詠し、戯曲・小説を閲讀する時には、全く一種の別天地に移つて、一切の我執・妄見は茲に全く消滅し、讀みゆく己、讀まるゝ文學一つに融けて差別もなくなり、唯何とはなしに怡悦満足の思をするものである。しかもこれは啻に一時の救のみでなく、永く吾等が生涯に影響を及ぼすものである。もとより獨り文學と謂はず其の他の藝術も、皆吾等を靈化する力をもつて居るには相違な

分登る

わけ登る麓の道は多けれど、同じ高嶺の月を見るかな。

い。併しながら音樂なり、繪畫なりは、割合に專門的技術的要素が多く、何人でも其の力に縋つて救濟を得るといふわけにはいかない。然るに文學にはその要素が少い。其の文字と文章とを解し得る人ならば、誰でも多少の救を受けることが出來る。是、私が文學は解脱の易行道であるといふ所以である。

凡そ吾等人間を救濟するものが三つある。第一は只今述べた所の文學の力で、第二は道德の力、第三は宗教の力である。文學は感情によつて直觀的に救濟の任務を果さうとし、道德は意志によつて漸進的に救濟しようとし、宗教は其の中間に立つて、半面は情により半面は意志によつて救濟せんとするものである。此の三者は此の如く分登る麓の路に於てこそ違へ、つまりは同じ高嶺の月を見んとするものである。かやうに考へれば、その何れの道によつて救濟を求むるも其の人々の自由であつて、必ずしも己に同

じき者に黨して、異なる者を伐つの必要がないことは明である。然るに世人は此の事を忘れて、所謂文學派の人々と、所謂道學派の人々と相鬩ぐが如き愚を演じて居る。

併し斯く言へば、或は「唯文學のみにより、もしくは道德のみによつて、果して全き人格の救濟が得られようか。」と問ふ者があるであらう。私は必ず之を可能であると信ずる。眞に美なるものは又必ず善を兼ね、眞に善なるものは又必ず美を含んで居るものである。卽ちカロースは必ずアガトンを兼ね、アガトンは必ずカロースを含んで居るものである。善を兼ねざる美なく、美を含まざる善はない。これは必ずしもヘラス民族の經驗ばかりではない、又吾等の親しく經驗するところであると思ふ。されば眞に美なる文學によつて救濟せられるものは、人格全體の救濟であり、眞に善なる法則によつて救濟せられるものは、矢張人格全體の救濟であ

カロース　希臘語、美の、意。
アガトン　同じく、善の意。
ヘラス民族　希臘民族のこと。

ると思ふ。

諸君、文學とは何であるか。文學は人生の力である。

將に虜酋の刄の下に、非業の最後を遂げなんとせる禪僧祖元が、纔に生命を全うするを得たのは果して何の力によるか。彼が死に臨んで泰然として吟詠した一絕の力ではないか。幾多幕末の志士をして感奮興起せしめた東湖の正氣の歌は、今日猶凛として生氣あり、眞に懦夫をして起たしめるの概があるではないか。徒に理想とやらにあこがれて、老いたる父母にさん〴〵歎を見せ、後でやつぱり其の父母が慕はしくなつて、現實界に還つて來た新曲浦島の太郎は、熱血涌きかへる多くの青年に向つて、理想は現實を離るべからず、唯此の現實界をさながらに淨土と觀じ、極樂と化すべきものであるといふ信念を鼓吹したのではなからうか。涙に沈める婦女、貧に苦しめる青年をして、再び生氣を呼起し蘇生せし

一絕
乾坤無ニ地卓一
孤筇喜得人
空法亦空。珍
重大元三尺劒。
電光影裏斬ニ
春風一。

めるものはすべてこれ文學ではないか。文學は人生の力である。此の力を得て此の力を利用せんとし、此の力によつて其の天福に與らんとする努力は、凡て人間の努力中にあつて、最も神聖な、最も高い努力の一つである。宗教家が其力を利用して自己の信ずる所の福音を傳へ、政治家が其の力を利用して經世濟民の具としたこと、古今東西其の例に乏しくないのである。

實に文學は人生救濟の具として道德・宗教と並び立つ者である。從つて彼等の間には互に相聯絡交渉する所がある。而して文學の力の最も直接に其の影響を及ぼす方向は道德の方面である。今文學創作者の立場からでなく、社會現象の一つとして文學を見るときには、其の影響は直接又は間接に、益〻道德を助け道德を高尚にするか、若しくはその反對に直接又は間接に、道德を破り之を墮落せしむるかといふ問題に歸著する。

かやうにいろ〳〵の影響があるから、見る人によつて文學の批評も違ふ。老人は「近頃の小說は實に風敎を害するの甚だしいものである。あれは絕對に禁止せねばならぬ。」といひ、青年輩は「美は美である。風敎と藝術とは世界が違ふ。」といつて、現代の作物を歡迎する。いかにも青年の云ふ樣に、美は美の繩張があるから、一概に風敎云々を以てこれに律することは出來ぬ。されば云つて、現代の作品をのみ追つて居て、更に高尚な作物のあるのを遺れて居るが如きは、これ亦贊成することが出來ぬ。文學と風敎との關係問題は、理想境に達しない現實の人生に於ては、つまる所一時の社會政策上の問題である。現今の道德に悖戻するが如き文學は之を禁止するのも、政策上已むを得ないことであらう。併し又一般讀者の趣味が漸々微妙に、漸々高尚になるならば、文學上の作品も漸次理想に近づくことであらう。結局理想は善美一致の

境にあるのである。

（時代思潮）

新日本讀本卷九 終

神皇正統記
北畠親房の著、神代から後村上天皇の御受禪までの事を記してある。北畠親房、源氏、吉野朝の忠臣、正平九年（二〇一四）薨、年六十三。

三箇國
武藏・常陸・下總。

ためしなき勳功
義仲を討ち、平家を滅した大功をさす。

高氏等
こゝは高氏等の先人をさして云つたのである。

附錄

神皇正統記抄

一 高氏

そも〳〵彼の高氏、御方にまゐれりしその功は、まことに然るべし。すゞろに寵幸ありて、抽賞せられしかば、ひとへに賴朝卿天下をしづめしままの心ざしにのみ成りにけるにや、いつしか越階（をつかい）して四位に敍せられ、左兵衛督に任ぜられぬ。拜賀のさきに、やがて從三位して、程なく參議從二位までに昇りぬ。三箇國の吏務・守護、および數多の郡莊をたまはり、弟直義左馬頭に任ぜられ、後、四位に敍せられぬ。昔賴朝ためしなき勳功ありしかど、高位・高官にのぼることは亂政なり。はたして又子孫も早く絶えぬるは、高官のいたすところかとぞ申し傳へたる。高氏等は賴朝・實朝が時に、親族など

とて擾恕することもなく、唯家人の列なりき。實朝の八幡宮に拜賀せし日も、地下前驅二十人の中に相加へられけり。たとひ賴朝が後胤なりとも、今更登用すべしとも覺えず。いはむや久しき家人なり。さしたる大功もなくて、かくやは抽賞せらるべきと、あやしみ申す輩もありけるとぞ。關東の高時、天命既に極まりて、君の御運を開きし事は、更に人力といひがたし。武士たる輩いへば數代の朝敵なり。御方に參りて其の家を失はぬこそあまりある皇恩なれば、更に忠を致し勞をつみてぞ理運の望をも企て侍るべき。しかるを、天の功をぬすみて己が功と思へり。介子推がいましめも習ひ知る者なきにこそ。かくて、高氏が一族ならぬ輩も、あまた昇進し、昇殿を許さるゝもありき。されば或人の申されしは、「公家の御世にかへりぬるかと思ひしに、なかなか猶武士の世になりぬる。」とぞありし。

實朝の八幡宮に拜賀せし日　實朝は右大臣になつた拜賀の爲、承久元年正月二十七日鎌倉の八幡宮に參詣した。

介子推　晉の文公の臣。文公位に即いて後、國難に當つた者を賞した。彼、之を目して天功を盜むものとして、身を隱して死んだ。

十訓抄　三卷。我國に於ける教訓書の嚆矢、建長四年に成るも其著者は、橘成季とし、菅原爲長とし或は六波羅二臈左衞門入道の作なりともいふ。

十訓抄抄

一　人の君となれるものは

或人いはく、人の君となれるものは、拙きものなりとも嫌ふべからず。文にいはく、「山は小さき壤を讓らず。此の故に高きことをなす。」といへり。また明王の人を捨て給はぬこと、車を造る工の材を餘さゞるにたとふ。曲れるをも短きをも用ふる所なり。厭はず。此の故に深きことをなす。」といへり。また明王の人を捨て給はぬこ

又「人の食物を嫌ふ事あれば、其の身必ず瘠す。」ともいへり。總じて大人は賤しきを嫌ふまじと見えたり。凡そいとほしければとて謬りて賞をも過さず、にくければとて濫がはしく刑をも加へずして、普く均しき惠を施すべしとなり。又人に一度の咎あればとて重き罪を行ふことよく思慮あるべし。騏驥といふ賢き獸おのづから一躓のあやまりなきにあらず。人としてもいかでか其の理をはなれん。然れば書に曰へるがごとく、「小過を赦して賢才を見るべし。」となり。其の咎あまたゝびに及ばば、宥むるに力及ばざるべし。君をはかりて要をかまへ、かたへを欺いて其の祿を望むやからをばふかく退くべし。其

山は小さき壤を云々　史記の李斯傳に太山不レ讓二土壤一故能成二其大一。河海不レ擇二細流一故能就二其深一。

明王の人を云々　唐の太宗の帝範に明王之使レ人如二巧匠之制レ木。

人の食物を云々　孝經の註に人皆レ食則體瘠矣。

小過を赦して　論語の子路篇に仲弓爲二季氏宰一問レ政。子曰先二有司一赦二小過一舉二賢才一。

佞人朝にあれば　孝經の註に姦人在レ朝賢者不レ進。

讒諛の甚だしき　前漢書の鄒陽傳に夫以二孔墨之辯一不レ能ニ自免二于讒諛一。

の故は「佞人朝にあれば忠正のもの進まず。」と云ひ、讒諛の甚だしき孔墨のさきらをも免れがたしなども聞ゆれば、不忠の輩は更に情の限にあらず。只不覺ならんものの咎を宥して、能なき輩をも憐びはぐくむべしとなり。

二　人をあなづることは

或人いはく、人をあなづることは、色かはれども必ずある事なり。或は貧しく賤しきをも慢り、或は不覺なるをも慢り、或は我よりさがさばかりにこそと思へり。或は親しみむつるゝをも慢り、大方不運なる者をば、行ふ所の事がらよからぬやうに思ひ、賤しき者は、ふるまひと振舞ふ事徒ら事と思へり。これは無智の人のある事なり。これによりていふまじき言をもいひ、すまじきわざをも振舞ふほどに、あなづるかづらにたはぶれして、思はざる外のはぢがましき事にもあひ、厭はるまじき者にも厭はれぬれば、人に輕く思ひけたれ、心劣りせらるゝなり。孤兒・寡婦なりとも欺くべからず。重く本

薫蕕器を異にす　顔淵曰、薫蕕不二同レ器而藏一。（孔子家語）

四人の翁　南山の四皓ともいふ。東園公・綺里季・夏黄公・角里先生　秦の人々。

七賢　嵇康・阮籍・山濤・向秀・劉伶・王戎・阮咸・何れも晉の人。

人の心を信ずべし。人にとりて堅く慎むべし。

三　はかなくうち語らはむ友なりとも

はかなくうち語らはむ友なりとも、よくその人を擇ぶべし。「薫蕕器を異にすべし。」となり。花のもとに春ばかりをちぎり、月の前に一夜を限る友までも、情あるたぐひは忘れがたく思ひ出でらるゝものなり。すべて友を語らふには隔つる心なきを德とす。ゆめ〳〵心惡しからむ人には伴ふべからず。芝澗にすみし四人の翁、竹林にこもりし七賢の類、さこそ思はしき友なりけめ。

四　萬の事を思ひ忍ばむは

萬の事を思ひ忍ばむは優れたる德なるべし。人の心の中に諸〻のあしき事をのみ思ふ。これを忍ばざるは淺ましかるべし。人の身の上にさま〴〵の苦あり、これを忍ばざるは世に立ちめぐるべからず。中にも年若きともがらは、飢を忍びて道を學び、寒さを忍びて君に仕へつゝ、家を起し身を立つるはかりごとをすべきなれば、何事につけても、かた〴〵物に堪へ忍ぶべきなり。

年々隨筆
石原正明著。石原正明、尾張の人、歌人、文政四年（二四八一）歿、年六十二。

唐人の
晉の庾亮が武昌揚子江のほとりの南樓にて、友と月を賞した故事。

五　世の中のかはり行くさま

世の中のかはり行くさま、昔よりは次第に衰へもて行くにつけつゝ、道々の才藝も又父祖には及び難き習なれば、藍よりも青からむ事はまことに稀なりといへども、形の如くなりとも箕裘の業をつがざらむ、口惜しかりぬべし。

年々隨筆抄

一　月

月は水のほとり殊によろし。いと大きなる川ののどやかに流るゝあなたの岸にまどゐして打突ひなどしたる、唐人の登りけむ南の樓思ひ出でられて、誰ならむとゆかしきに、千里に明なりと詠ずるにやあらむ、ほの〴〵聞ゆるいとをかし。

二　雪

雪はいづくも〳〵をかし。たゞ海のみすさまじげなり。それも湊江の蘆すこしばかり折れ残りたるひまに、泊舟二つ三つ篷いと白う見ゆるはをかし。市の中は何事も目とまることなけれど、たゞ雪の朝こそめづらしうをかしけれ。すべていづくも雪はけしきことに處かはりたる心地してめづらしうをかし。日のさしのぼる程みな起出でて、往來さかしきまで道あしうなりぬべし。いとあぢきなし。「とく掃き集めよ。取捨てよ。」などいひさわぐこそ悲しけれ。

散るぞめでたき
殘なく散るぞめでたき櫻花、ありて世の中はてのうければ。（古今集）讀人不知

三　ゆふべやまさりたらむ

ゆふべやまさりたらむ。村雨などごりなく晴れ、風いと涼しうて山の端の雲いと白うわざとならずところ〴〵に懸れるに、いざよふ月の今出づべきにやあらむにほひうつりて見ゆる。あしたやまさりたらむ。峰の松原濃きみどりなるに茜の色燃ゆるやうにて日のなからばかりさし出でたる。

四　櫻

散るぞめでたきと詠みしもことわりなり。櫻のさかりはたゞ二日三日ばかり、あまりあへなき心地はすれど、又來む春はと心いられして待たるゝも、

久しからぬ故ぞかし、唐桐といふもの、葉のさま涼しげに、花の色いとめでたけれど、夏の半より秋過ぐるまで、たゞ同じさまに咲きたるに飽きはてて、とく枯れよかしとさへぞ思はるゝや。

五　菊

唐國にては菊は黃なるを愛づめり。詩どもにも黃菊・黃花などぞ聞ゆる。皇國にはおきまどはせると霜によそへしより始めて、白きをむねと言ひならはしたり。實に手を盡したる種々の色よりも、白菊・黃菊のいたく大きならず、小さくもあらぬを、わざとつくろひなどもせで咲かせたるこの園の中など、そこらの松蔭に匂ひみちたるこそをかしけれ。そが菊とは黃菊のことなりといふ、さる事にや何がしとかや聞えし連歌師の句に、

黃菊白菊その外の名はなくもがな

さる事なり。

六　古今のうつりかはり

おきまどはせる　心あてに折らばや折らむ初霜の、おきまどはせる白菊の花。凡河内躬恒（古今集）

何がし　服部嵐雪。

學の道にこゝろざす人は。古より今に變り來し有樣をよく知りえむと心がくべきわざなり、古の事上より見ては、いと思の外に異なるふしあるものにて、事によりてはその移り來しことわりわかぬもあり。さるをたゞひたぶるに文のうはべと今の世のさまとを思ひ合せて、大方にのみ心得ゐては、かすめる夜半の月見るやうにて、いとおぼ〳〵しきものなり。そを明めむには廣く書を讀み、おのが考をもよく定めではなしえぬことにて、いと難きわざにしあれど、物學ばむとするものは、常にその變り來しさまをよく明めむと心がくべきものぞかし。

七　梅

梅の花いとめでたし。香はもとよりいはむ方なし。色も羅浮のをとめの月のもとに立てりけむ昔おぼえて艶にやさし。大方世の人は櫻をのみめでたきものにする、それまことにめでたけれど、桃・海棠など及ばずとも傍ある心地するに、これは異木の冬籠りたる中に匂いとこよなくて、氷のひまより打

羅浮のをとめ　隋の趙師雄が羅浮の梅花村で、月夜夢寐恍惚の間にあつた美人。

出づる波ならで、立ちならぶ花もなきは心とかりけりと思はるゝがをかしきなり。

檉園文集抄

檉園文集　中島廣足の著。中島廣足、肥後の人、國學者、元治元年（一二五二四）歿、年七三

一　燕

いとうらゝかなる日、思ふどち打連れ行く大路に、つばくらめのこなたかなた飛びかひて、ふと袖の下をすぎたる、手にも捕へつべくていとをかし。雨のなごりのなほかはかぬ方などに下りゐて、泥を含みつゝわらはべの走りくるに驚き立ちて遠く翔りゆくもをかし。梁に巣くひていつの程にかあまたの雛おほしたるが、飛びくる親を待ちて、口のかぎり開きつゝ鳴きさわぎたるさまはいみじうこそあはれなれ。

二　蚊遣火

晝のほどの暑けさは、水の上さへむとくにていと堪へ難かりしを、やう〳〵

二月の花よりも　停車坐愛楓林晚。霜葉紅於二月花。（杜牧）

日影もかたぶきて、木の間よりそよぎ出づる風のいと涼しきに、ゆあみなどして立出づれば、月の影さへほのめきて、晝の苦しさもかつ〴〵忘られぬ。やゝ遠く行くほど、道の傍なるしづが伏屋より煙のいとしげく立上るは、蚊遣ふすぶるにやと思ふに、大きなる火桶に何にかあらむ青やかなる木の葉をいと多くさし入れて、此方彼方あふぎちらすはいとあつかはしく、見る目もいぶせくて急ぎ歩みすぎて見れば、やう〳〵薄らぎゆく煙の杉の梢にたなびきたる、霞おぼえてをかしきに、かはほりさへ三つ二つ飛びかひたる。繪にも書かまほしき景色になむ。

三　鹿

雨少しうちそゝげど、かばかり思立ちつることはとて打連れ出づ。降るともなく霽れぬるは、この頃の空のならひなめり。いとしげき草葉の露を踏みわけ行くも、あながちなる山路なりや。思ひしもしるく、いと濃く染めわたしたる紅葉の霧の絶間より見えたるけしき、二月の花よりもと云ひけむやう

に、あはれ深う身にしみて覺ゆるに、夕風寒く吹きのぼる谷のあなたに、細き聲にて遙に打鳴きたるは鹿なりけりと思ふに、いと珍しく人々耳立てなる程、二聲三聲鳴きそへたる。あはれいみじき山踏のかひよと思ふに、おくれし人々もなつかしくなりぬ。

四　月

思ふどちまとゐして埋火かきおこし、心へだてなく物語するに、いつしか冴ゆる夜のけはひも忘られて、窗の戸おしあくれば、宵の浮雲なごりなくはれて、雪少し降りたる庭に月のさやかに照りたるが、いはむ方なくおもしろきを、かくてのみやはあるべき。徒に寢て明すらむあたりをも驚かしてむと、やがて打連れつゝあくがれ出づ。

五　遠山寺の入相の鐘

遠山寺の入相の鐘、ねぐらに歸る夕烏もいつしか聲しづまりて、向へる文卷もやう〳〵見えずなりゆくに、心ゆくわたりはいとくちをしきものから、

徒に寢て
かくばかりを
しと思ふ夜を
いたづらに、
寢て明すらむ
人さへぞうき。
（凡河内躬恒（古今集））

しばし打置きて端の方に出づれば、暮れ殘る梢どものほのかなる山の端に、僅にあらはれたる三日月の影こそいとをかしけれ。青鷺とかやいへる鳥の、あやしき聲に鳴きゆくが何となく物淋しげなるを來むといひつる友はた暮すぐしてやと思ふも心もとなきに、燈火かゝげたるこそまづ嬉しけれ。

六　旅　路

治れる世はうまやぢのゆきかひも賑はゝしく、人宿す家はた建て續けて、草ひきむすぶ思もなきものから、さすがに打解けてしも寢られぬは旅路の習なるべし。

七　聖　賢　の　書

いと若かりし程より、身のおこなひの心得にとて、をり〳〵聖賢の書を讀むたびに、その教をげにさることぞと思ひ信じて、いかでさやうはせばやと志して年經にければ、拙しくてなしえぬものから、わが身のためとなりぬること多かり。

ふりかくして し

踏分けて更にや訪はむもみぢ葉の、ふりかくしてし路と見ながら。讀人不知（古今集）

かの夕日

秋は夕ぐれ、夕日はなやかにさして、山の端いと近くなりたるに、烏のねどころへ行くとて、三つ四つ二つなど飛び行くさへあはれなり。（枕草紙）

八木の葉

ふりかくしてしなど打誦せらるゝものから、ことさらに踏分くる人もやと手づからはゝきとりて、門のあたり少しかきはきなどするに、又も吹き來る嵐に打散りまがふがかたへよりつもり行けば、はゝきもふようにて箒子にしりかけつゝ見居たるほど、やう〳〵暮近くなりてねに行く烏どもの、みだれあふ木の葉に飛びまがひたるは、かの夕日はなやかにといひし秋よりも、今一きは身にしみてあはれなるに、風いと寒くなれば引きたてて内に入りぬ。なほ吹きまどはす木の葉のはら〳〵とさうじに散りかゝりたる、時雨さへそふ心地していとをかしく。

附錄 終

略字表

左の字體を本位として用ゐること。

（括内弧の小字は字典體）

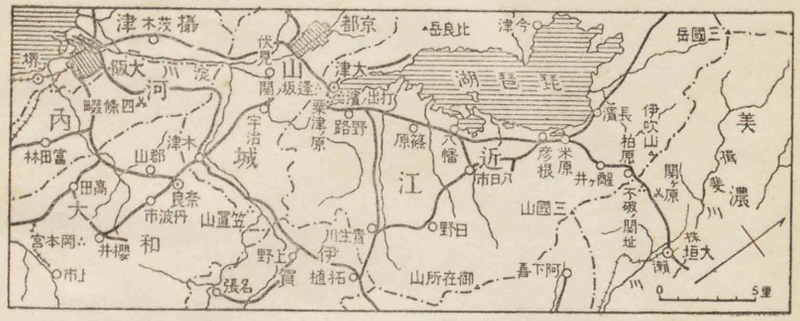
勧（勸）　権（權）　潅（灌）　歓（歡）　観（觀）
沢（澤）　択（擇）　訳（譯）　駅（驛）　釈（釋）
変（變）　恋（戀）　蛮（蠻）　湾（灣）
茎（莖）　径（徑）　経（經）　軽（輕）
併（併）　塀（塀）　瓶（甁）　餅（餅）　研（研）
斉（齊）　斎（齋）　済（濟）　剤（劑）
残（殘）　浅（淺）　賤（賤）　銭（錢）
労（勞）　営（營）　栄（榮）　学（學）　覚（覺）

挙（擧）　誉（譽）　断（斷）　継（繼）
歯（齒）　齢（齡）　湿（濕）　顕（顯）
窓（窗）　総（總）　属（屬）　嘱（囑）
為（爲）　偽（僞）　帯（帶）　滞（滯）
参（參）　惨（慘）　両（兩）　満（滿）
発（發）　廃（廢）　鼠（鼠）　猟（獵）
乱（亂）　辞（辭）　潜（潛）　賛（贊）
走（走）　徒（徒）　従（從）　縦（縱）
悩（惱）　脳（腦）　処（處）　拠（據）
担（擔）　胆（膽）　来（來）　麦（麥）
寿（壽）　鋳（鑄）　数（數）　楼（樓）

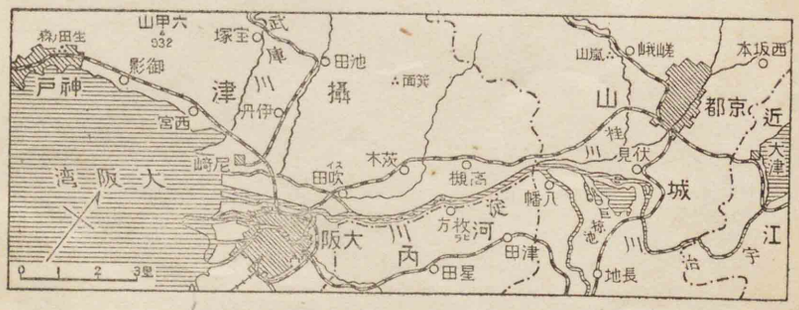
楽（樂） 薬（藥） 読（讀） 続（續）
竜（龍） 滝（瀧） 隨（隨） 髓（髓）
庶（庶） 鹿（麗） 聽（聽） 廳（廳）
虚（虛） 戯（戲） 遅（遲） 解（解）
独（獨） 触（觸） 畳（疊） 摂（攝）
虫（蟲） 蚕（蠶） 仮（假） 児（兒）
励（勵） 嘗（嘗） 国（國） 囲（圍）
口（圓） 図（圖） 壱（壹） 実（實）
写（寫） 宝（寶） 扣（控） 叙（敍）
条（條） 様（樣） 帰（歸） 気（氣）
炉（爐） 犠（犧） 献（獻） 画（畫）

畄（留） 尽（盡） 礼（禮） 称（稱）
糸（絲） 欠（缺） 声（聲） 台（臺）
旧（舊） 万（萬） 号（號） 証（證）
豊（豐） 弁（辨辯） 逓（遞） 辺（邊）
医（醫） 鉄（鐵） 関（關） 双（雙）
霊（靈） 余（餘） 舘（館） 体（體）
塩（鹽） 点（點） 覚（覺）
闘（鬪） 則（刻） 亀（龜）

略字表 終



第四課（東路の旅）參照



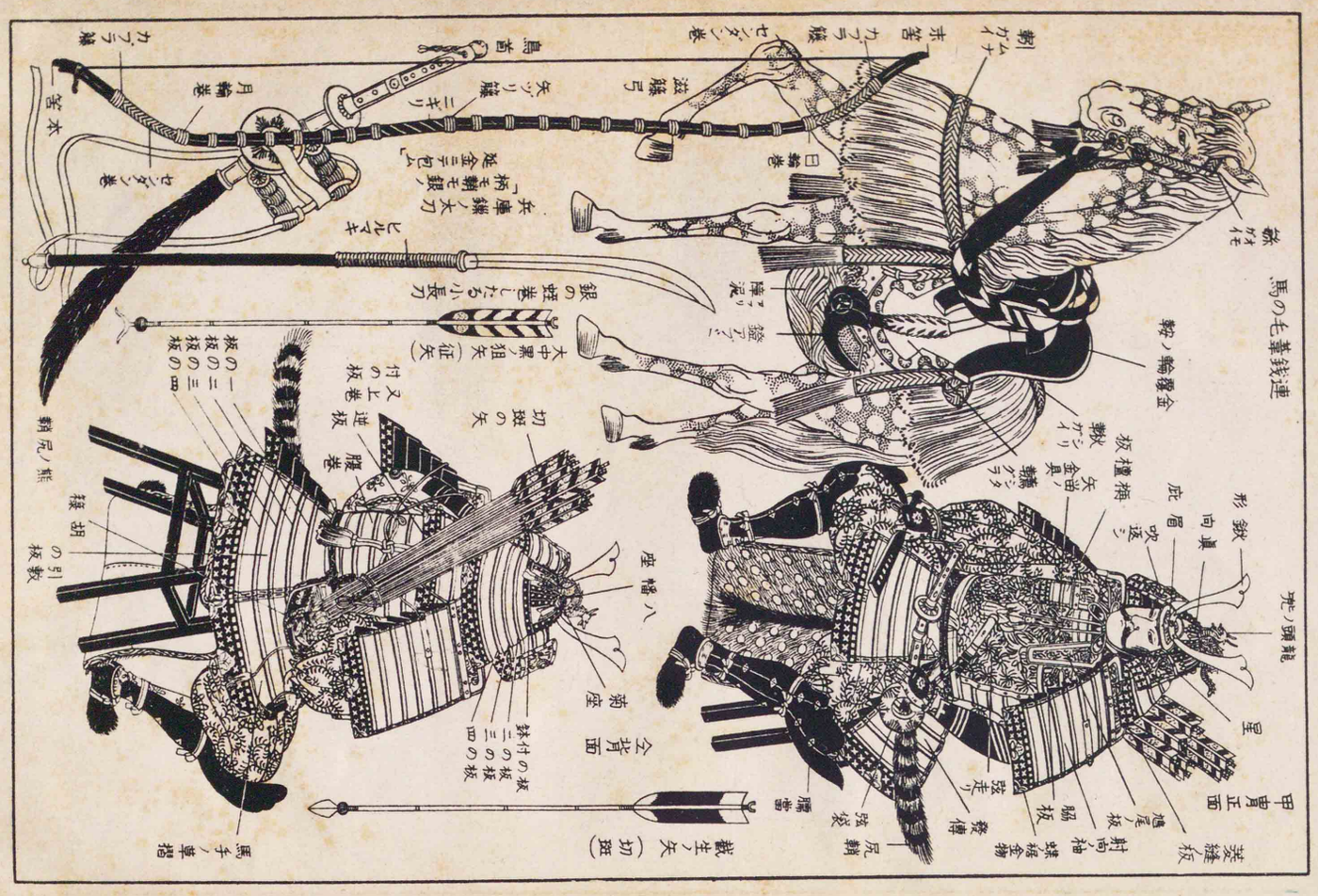
第十三・四課（小山田太郎高家）參照

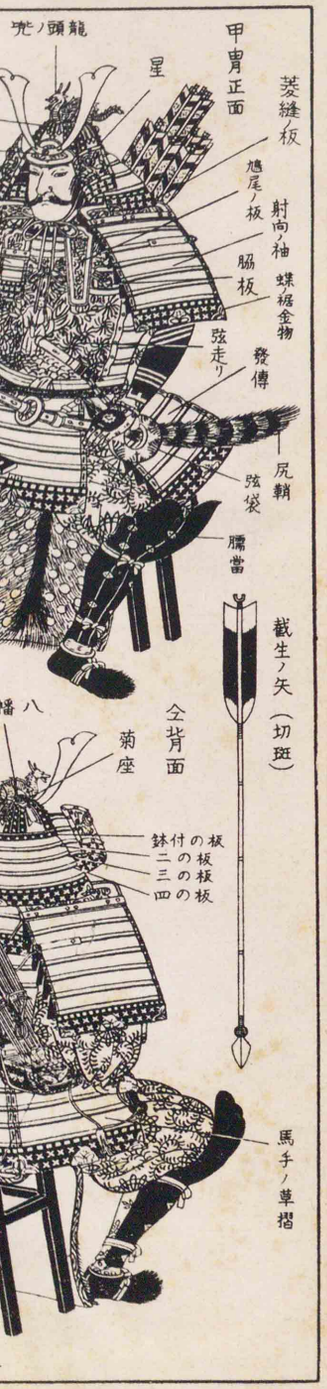
（新日國第九卷　參考圖）

写（寫）	宝（寶）
条（條）	様（樣）
炉（爐）	犠（犧）

扣（控）	叙（敍）
帰（歸）	気（氣）
献（獻）	画（畫）

略字表終


馬の毛葉鐵連
兜ノ頭龍
形鍬
向眉
虎
吹返シ
星
甲冑正面
菱縫板
鞍ノ輪羅金
板檀裲
鞦ガイリ
矢留金ノ鐵グタ
鳩尾ノ板
射向ノ袖
蝶綾金物
脇板
弦走リ
籠傳
尻鞘
臑當
弦袋
截生ノ矢
（切斑）
座幡八
菊座
公背面
鉄付の板
三の板
四の板
鞍ノ一
板の二
板の三
板の四
黒子ノ革褶
鞍胡の引板
朝尻ノ熊
又上巻
付の板
履巻
切斑の矢
大中黒ノ狙矢（征矢）
銀の蛭巻したる小長刀
鐙アブミ
懸アブリ
鞦ガイモ
射ムケガイ
赤笠カブラ鏑
セダン巻
滋籐弓
日輪巻
矢ツリ鏑
ニギリ
鳥首
柄も鞘も銀ノ延金ニ包ム
矢庫鏑ノ大刀
ヒルマキ
月輪巻
セダン巻
赤笠カブラ鏑


龍頭ノ兜
甲冑正面
星
菱縫板
鳩尾ノ板
射向ノ袖
脇板
蝶裾金物
弦走リ
發傳
尻鞘
弦袋
臑當
截生ノ矢（切斑）
八幡
仝背面
菊座
板付ノ鉢
板の二
板板三
板板四
馬手ノ草摺

緋縅
萌黄匂縅
小櫻縅
卯花縅
澤瀉縅
黒糸縅
赤地錦ノ直垂
大紋
直衣（冬）
腹當
木蘭地ノ直垂
指貫

連銭葦毛の馬
龍頭ノ兜
甲冑正面
鍬形
眞向
眉庇
吹返シ
星
栴檀板
鳩尾ノ板
射向袖
脇板
蝶番金物
弦走リ
尻鞘
弦袋
臑當
截生ノ矢（切斑）
金覆輪ノ鞍
矢留ノ金具
末筈
カブラ籐
日輪巻
センダン巻
滋籐弓
矢ヅリ籐
ニギリ
月輪巻
センダン巻
カブラ籐
本筈
障泥
鐙
兵庫鎖ノ太刀「柄モ鞘モ銀ノ延金ニテ包ム」
ヒルマキ
銀の蛭巻したる小長刀
大中黒ノ狙矢（征矢）
切斑の矢
全背面
八幡座
菊座
鉢付の板
一の板
二の板
三の板
四の板
又上巻付の板
逆板
腹巻
一の板
二の板
三の板
四の板
馬手ノ草摺
熊ノ尻鞘
胡簶
引敷の板

小櫻縅
萌黄匂縅
緋縅
黒糸縅
澤瀉縅
卯花縅
大紋
赤地錦ノ直垂
直衣（冬）
腹當
木蘭地ノ直垂
指貫

文部省檢定濟

大正十五年一月二十八日　中學校國語科用

大正十四年十月十日印刷
大正十四年十月十三日發行
大正十五年一月三日訂正再版印刷
大正十五年一月五日訂正再版發行

新日本讀本	昭和四年度臨時定價
卷一・二　金四拾四錢	金七拾參錢
卷三・四　金四拾五錢	金七拾五錢
卷五―十　金參拾九錢	金六拾五錢

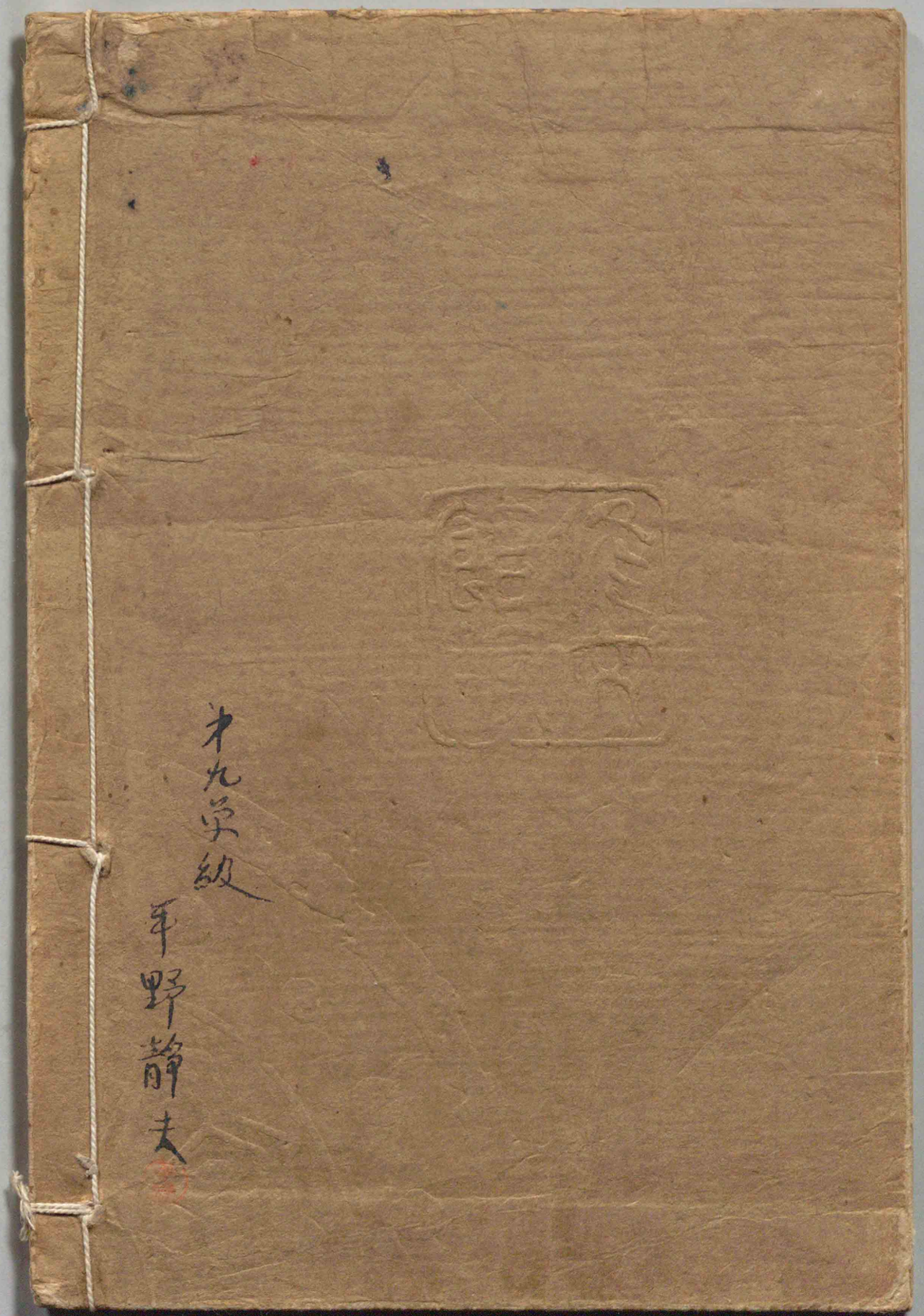
編者　吉澤義則

印刷兼發行者　東京市神田區表神保町二番地　鈴木政雄

發行者　大阪市東區博勞町五丁目五拾六番地　鈴木常松

發行所　東京市神田區表神保町二番地　振替口座（東京二六四四番）　東京修文館

發行所　大阪市東區博勞町五丁目五拾六番地　振替口座（大阪四七一一番）　大阪修文館


第九学級
平野静夫